
人間VS獣人

アグレイル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

人間VS獣人

【Nコード】

N2411T

【作者名】

アグレイル

【あらすじ】

ある日、突如としてそれは現れた。それは人間の外見と動物の外見を持ち合わせた獣人という生物。その獣人が現れ、この世界は徐々に崩壊していく。獣人の目的とは一体何なのだろうか？この先、世界はどうなってしまうのだろうか？

1 1 獣人出現

ある雨の日の事。その日はいつもの雨とは違い、雷が轟き、突風が吹いていた。川は氾濫し、道路まで流れ出している。現在この辺一帯を台風が通過しようとしている。今までにない巨大な台風がこの副田町を襲っていた。勿論、学校は何処も学校閉鎖。外は誰ひとりいなかった。荒れる天候を窓越しに見ている八幡潤一。潤一はこの町の高校2年で美術部に所属している。絵を描く事が潤一にとって興味である。しかし、学校閉鎖が続く、その間は絵を描いていない。ここ何日か外に出られずに退屈していた。この状況で外に出れば、命の保証はない。それは言うまでもない事だ。頼杖をため息をついている。

「暇だな・・・いつまでこの天候が続くんだか。そろそろどっか行つてしまえよ。台風21号さんよ」

そんな事を行って行く訳もない。台風は自然災害の1つだ。人間があくだ言ったところでその通りになる事はまずあり得ない。そんな事は分かっているのだが、つい口からそのような言葉が出てしまう。この風景を絵に表そうとも思わなかった。そんなとき、携帯の着信音が響いた。誰からか電話の様だ。潤一は急いで携帯を開いた。相手は同じ学校の同級生で友達の多々野利幸ただのとしゆきだった。現在時刻は午後11時。こんな時間に何の用だと通話を開始した。

「はい、八幡だけ何か用か？」

「こんな時間に申し訳ない。今日さく外で何かを見なかったか？」

「は？何って？」

「それが、よく分からないんだ。なんか・・・人間の様だったんだけど、犬の頭に尻尾と、あと全身が毛に覆われていた奴」

「・・・・・・はあ？」

言っている意味がよく分からなかった。何を伝えたいのかそれが伝わってこない。頭を掻きながら質問してみた。

「お前が言いたいの、獣人っていう奴か？」

「そう、それだ！今日、俺の家の前をそんな奴が横切ったんだ」

「見間違いじゃないの？獣人がおる訳ないし」

「・・・・・・そうなのかな？」

獣人とはようするに人間の外見と動物の外見を持ち合わせた生き物の事。リザードマンとか半魚人。あと、バフオメットとかがそうだ。それらのものは架空の生き物にすぎない。だから、現実で見かける事はまずあり得ないはずだ。潤一は利幸のいう事を信じていなかった。利幸自身も見間違ないかなと思っている。

「やっぱり見間違えだったのかな？」

「第一、そんな生き物いたら大騒動が起きるだろ？だけど、何の騒ぎもない。きつと普通の人間と見間違えたんだよ」

「やっぱりか・・・うーん残念だな」

「まあ、俺もそんな奴がいたら会ってみたいものだね」

「だよな・・・わりいなこんな時間に変な話に付き合ってもらって
よ」

「気にするな。寧ろいい気分転換になったから」

「じゃ、また」

「おお」

会話は終了した。携帯を閉じ、机の上に置いた。潤一はやる事がなくなったため、寝ることにした。部屋の明かりを消すとベッドに横になった。明日こそ、晴れてくれる事を祈って眠りについた。

*

「・・・ばれたか？いや、騒ぎは起こっていないから大丈夫か」

そう呟きながら雨の中を走る謎の影。体全身をコートで覆い、姿を見えない様になっている。その影は潤一の家近くにある公園に入った。辺りを警戒しながら、公園の端にある茂みに入った。そこで手を地面に翳した。すると、地面が開き、その下には階段が続いている。影はゆっくりと階段を下りていく。影が完全に中に入ると、入り口は再び閉ざされ、外見からはそこに入り口があるか分からなくなった。階段の先には大きな空間があり、そこには同じコートを纏

った影が数名いた。1名が帰ってきた影に気付いた。

「帰ったか。どうだ？人間共は私達の存在に気付いていたか？」

「いえ。全く気付いていません」

「そうか。人間も馬鹿だね。こんなに堂々と地球外から来て、ここに潜伏をしているのに全く気付かないとは。やはり、私達の方が人間どもより利巧と言う事だ」

「それより、計画は進んでいるのか？」

「勿論。近々実行したいと思う。しかし、普通にやっては人間共には気付かないだろう。必ず人間共が気付くようなところでやりたいものだ」

「それならいい場所がありますぞ。電車と言う鉄でできた乗り物が」

「おお。あの乗り物ならすぐに気付くだろうな。でも普通にやっては面白くない……」

その者はその後、影に自分が考えた案を話した。

「成程。それはいいですね」

「さあ、人間共よ。私達がこの世界を征服して見せますぞ。まあ、当然私達が勝つに決まっていますけどね……。ははははははっ！」

その甲高い笑い声はこの空間の中で木霊していった。

*

翌朝、雨は小康状態となつてはいたものの、外に出るのには影響がなさそうだった。朝の連絡で学校を再開するとの連絡があり、潤一はいそいそと学校に行く身支度を開始した。まずは自室で制服に着替えた。1階に降り、親が用意した朝ご飯をニュースを見ながら頬張る。20分で食べ終えると、最後の確認をし、鞆を肩に掛け、家を出た。

雨が降っていた為傘をさして登校した。潤一の通う学校はここからまず、駅まで歩き、駅から電車に乗って10個先の上副田駅で下車。そこから歩いて10分のところに副田学園がある。家から約40分の道のりである。潤一の乗り込む駅、今原橋駅はあまり人の乗り降りはない駅である。唯一乗る駅が一緒なのは、同じクラスの友達、日比谷誠二ひびやせいちがいる。いつもそ一緒に同じ電車に乗り込む。しかし、今日は誠二の姿を見ていない。不思議に思いながら電車に乗り込んだ。4つ目の駅で利幸が乗り込んできた。利幸も誠二がいない事に気付いた。

「誠二はどうしたんだ？」

「今日は姿を見ていない。休みじゃないのか？」

「あいつがね、珍しい」

誠二が休み事は滅多にない事だ。少々不思議に思うのも無理はない。しばらくすると下車する上副田町に着いた。電車を降り、急いで学校に向かった。今日は雨の影響で電車に遅れが出ていた。ギリギリで学校に着いた2人。2人とも息を切らしていた。2人が入ってきたと同時に先生が教室に入ってきた。潤一はある事に気付いた。

「先生・・・何か思いつめたような表情をしているけど何かあったのか？」

「さあ？俺が知っている訳ないだろ？」

潤一の疑問に笑いながら答える利幸。確かに利幸も先生の表情がいつもと違う事には気付いていた。何かがあつた事は分かるが、内容までは分からない。先生はゆっくりと口を開いた。

「生徒の諸君に1つだけ忠告したい事がある。知らない奴、もしくは知らない“生物”には関わるな。・・・以上だ」

はい？それだけか？そんな事のために深刻な顔をしていたのか？ちよつと先生らしくないぞ。そういう目で先生を見た。先生はそれ以上は何も言わずに教室を出た。ホームルーム終了・・・ってことかな。

1時間目、現代文。とにかく教科書を読む授業だ。途中で眠くなってしまう。気分転換に外を眺めた。朝より雨が強くなっていた。大粒の雨が降り注いでいる。帰りはびしょ濡れか・・・と思っている。と外に何か動くものを見た。

「ん？コート？風で飛ばされたやつかな？」

と考えたがその考えは一瞬で打ち崩された。そのコートは風に関係なく空を漂っている。潤一は眠気が吹っ飛んだ。そして、授業そっちのけでコートを見ていた。そのコートの存在にほかの奴等は気付いていなかった。そして、コートがはつきりと見えたとき潤一は目を疑った。人・・・いや、腕には無数の羽があり、足はまるで鳥・・・こんな生き物見た事がない。これって・・・獣人って奴か？もしそうだとしたらこれはなんかの鳥の獣人。潤一は驚きの表情を見せる。獣人は存在に気付かれた事に戸惑い、その場から去った。

「なんだ？今の生き物は・・・」

潤一はその後、あの生き物の事ばかり考えていた。あれは見た事もない生物。獣人は架空のものだと思っていたけど、確かに見た。幻とかそんなんじゃない事がはつきりと言える。その事ばかり考えていると授業はあっという間に終わった。

昼休み、潤一は利幸に謝った。昨日の利幸の話の事についてだ。

「すまない。お前の話を信用しなかった事を許してくれ」

「おいおい。そんな事で謝るなよ。それより、お前も見たってことはやっぱり俺が見たのは見間違いないってことになるな・・・」

「そうなるな・・・でも何でこの現実世界にそんな奴がいるんだ？」

「さあな。あいつ等のやりたい事でも分かればいいのだが・・・」

弁当をつつきながら獣人の事について話していた。利幸が見た犬の様な獣人といい、潤一が見た鳥の様な獣人……。何が目的で姿を現しているのか見当がつかない。そもそもそんな生き物、今まで見たという事例がない。もしかして、最近誕生したのか？いや、最近だったらあんなに大きくはならないだろう。はやくても10年ぐらいは経っているはずだ。頭の中で情報が入り組んで混乱しかけている。とりあえず、この話はここで終了。次の授業の用意をし始める。

*

午後の授業が終わり、終礼。潤一と利幸はゆっくりと教室を出た。あっ誠二はというと熱のため、学校を休んだとか。インフルエンザみたいに高熱が出て大変な状態なんだと先生が言っていた。潤一は帰りに誠二のお見舞いに行こうと考えていた。昇降口から靴に履き替え、正門から学校を出た。雨は小雨となっていて、傘をさすほどではなかった。ゆっくりと歩いていると、何者かの気配を感じ始め立ち止まる利幸。少し身震いをしていた。それに気付いた潤一はどうしたのかと尋ねた。

「誰かが、俺達をつけている様な気がするんだ……」

「俺達をつけてる？一体誰が……。俺達をつけるなんてよっぽどなもの好きなんだろうな」

「なんか……。睨みつけられている様な……。背中に視線を感じて」

「・・・」

潤一は後ろを見た。しかし、そこには誰もいない。雨の粒が木の葉に当たり音を立てて落ちて行く音しかしなかった。隠れる場所もない。

「誰もいないな・・・。お前の思い込みじゃないのか？」

「そうなのかな？確かに誰かの視線を感じたと思ったんだけど・・・」

周りを警戒しながら再び歩きはじめる。少し早歩きをしながら、急いで駅に向かつていった。その後は何の異変もなく、駅に着く事ができた。相変わらず雨の影響で遅れが出ていた。20分ほどの遅れ。次の電車が来るまで2人はホームのベンチで待っていた。雨のせいか人が少ない。潤一は先頭車両が止まるホームの端の方を見た。そこには見覚えのあるものがあつた。

「・・・おい、利幸」

「どうした？」

「あれ・・・」

潤一の指さす方にはコートを纏い、姿を隠した人の姿があつた。利幸も潤一が何を言いたいのか理解し、少し焦っていた。潤一も利幸もあのコートを見た事がある。

「・・・もしかして・・・」

「いや、まだ、断言する事は出来ない。違う可能性だってある。今は様子を見た方がいいかもしれない。なるべく自然な感じで」

「分かった」

そんな会話をしていると遅れた電車がホームに入ってきた。停車するとドアが開いた。コート姿の者は一番前の運転手が見える所にいた。2人は焦りを見せず、自然にコート姿の隣に来た。壁に設置されている手すりを握って、様子をうかがっていた。電車は扉を閉めるとゆっくりと走り始めた。速度はどんどんあがり、100?の速さぐらいになった時だった。あのコートが動き始めた。2人は静かにその行動を見ていた。コートは運転手に向けて手を挙げた。そして、目を瞑ったと思ったらずくに目を開いた。それと同時に運転手が微かに緑色の霧に包まれたような感じになっていた。これは運転手や他の乗客は気付いていなかった。何かを達成したかのようなそぶりを見せながら、別の車両に移っていった。

「かなり怪しいな・・・」

「あいつは一体何をしたんだろう・・・」

「さあ・・・よく分からないが・・・何かを運転手に・・・」

「うぐわあっ!」

突然、運転手が苦しみ始めた。その異常事態に真っ先に気付いた潤一と利幸。その声のほかの乗客も異変に気付く。潤一はドア越しに運転手に話しかけた。

「だ、大丈夫ですか!??」

「うぐわっ……体が……体が熱い！」

「体が熱い？」

「水で冷やすか？」

「ここに水がある訳ないだろ。もうちょっと周り見て考えてくれよ
利幸」

「わりい……」

そんな会話の中でも運転手は苦しんでいた。ただならぬ状況に車内はどよめき始めた。中には怖くなって泣き出す子供もいた。そして、まのあたりにした。運転手が、動物と化していく所を……。

1 1 獣人出現（後書き）

できれば、評価&感想をよろしくお願いします。っ

1 2 暴走列車を止める！

目の前で起きている事は現実だ。夢ではない。確かに運転手は何かの動物に変貌しようとしている。腕は・・・確認できる限りでは緑色の鱗の様な現れ、指からは鋭い爪が生えてきた。そして、服を突き破って尻尾が出てきた。その尻尾も緑色の鱗に覆われている。次第に何であるか分かってくる。顔は前に伸び、爬虫類の様な顔になった。

「うあああああ！グウワァ！」

声は恐ろしいほど低くなり、人間の声が出せないようだった。

「ウグツ！グウ！」

苦しがつている。まだ、中では骨格などが変形している。しかし外見からしてそれが何の動物か分かった。よくアマゾンの川で見かける奴だった。

「ワニ・・・ワニだ・・・」

目を見開いて焦りながら、変わり果てた運転手を見た。人間の意識もあるようで、助けを求めている。必死に立ち上がるようにしているが、立てる訳がない。ワニは4足歩行に適した動物だ。何か言いたいようだったが、人間の言葉が話せない為、伝わらない。しかし、すぐに異変に気付いた。電車のスピードがどんどん上がっている。潤一は運転台を見た。スピードを上げるレバーがMAX状態になっていた。電車はどんどん加速していく。普通電車ではあり得ないスピードで走行しているため、車内の乗客は一斉に騒ぎ始めた。

「え？どうなってるの？どンドンスピードが出ているわよ？」

「運転手はどうなってるんだ？悲鳴が聞こえたぞ？」

「うわ！？ワニがいるぞ！」

「嘘！？逃げろ！」

「うわーん怖いよー！」

完全に混乱状態だった。立ち上がって焦る者もいれば、泣き出す子供の姿もあった。中には電車から出せとやや狂った状態で叫ぶ人の姿もあった。

「これはやばいぞ！すぐに止めないと」

潤一は運転台に続く扉を開けようとした。しかし、扉はビクともしない。向こう側から鍵がかけられているためだ。力づくで開けようとするがやはり無理。とここで、電車が急カーブに入った。

ギイイイイイ

もの凄いスピードだったため、車体が傾いた。状況は片方の車輪だけで走っている状態だ。今にも脱線しそうな状態で走っていた。車輪からは火花が散り、とても危険な状況だった。車体は傾き、乗客は壁に叩きつけられた。利幸もその1人だった。潤一は咄嗟に手すりを掴んだ為、叩きつけられる事を免れた。

「いつてー！」

「利幸！大丈夫か！？」

「ああ・・・なんとかな・・・」

「利幸！お前はあのコートの奴を捕まえる！俺はこっちをどうにかする」

「わ、わかった！」

利幸は急いで、別の車両を探し始めた。車体はカーブが終わった事により元の角度に戻っていた。利幸は車内を探すが何処にもあのコート姿の奴がない。周りを懸命に探す、やはり見つからない。3両目でガラスが割れた窓を発見した。既に逃げてしまったようだった。

「くそっ！既に逃げたか・・・」

一方、潤一の方は扉に苦戦していた。体を叩きつけたりして、無理やり開けようとするが、頑丈な扉はビクともしなかった。運転手だったワニはただじっと見ていることしかできなかった。必死になるが、体力が限界になってきた。しかし、休んでいる暇はない。現在の時速は150？を超えている。このままではいつ脱線してもおかしくない。

「くっ・・・どうしたらいいんだよ・・・あっ！この鞆を使って・・・」

潤一は肩にかけていた鞆を手にとって思いっきり叩きつけようとした。しかし、急に車体が傾き、もっていた鞆が窓を突き破って外に飛び出した。

「あつ！くそつ。何でこうなるんだよ！どうしたらいいんだ」

乗客は相変わらずパニック状態で手を貸してくれそうにない。電車はもの凄い勢いで本来停車するはずの駅を通過していった。ホームで待っていた人たちは吃驚していた。駅員は異変に気付き、すぐに駅長に伝えた。しかし、暴走列車をどうする事も出来ない。もの凄い速さで、立っている事がままならない。手すりを掴んでなんとか立っていた。このままじゃ、多くの被害を出してしまう。どうしたらいいかと知恵を振り絞った。結果、あの方法だけが頭に浮かんだ。しかし、この状況ではその方法は危なすぎる。しかし、そんな事を言っている場合じゃなかった。

「やるしかない！」

潤一は手すりを放して、車内の半分のところまで来た。そして、揺れる車内を走った。そして、その息尾のまま、扉に突っ込んだ。

ドンッ

扉は壊れ、中に入る事ができた。しかし、ここからが問題だった。潤一は電車の扱いは全く知らない。一体どのボタンを押せばいいのか分からなかった。とにかく何かを押してみた。

プワァァァン

「警笛かよ！ブレーキはどれだよ！」

焦りを見せながらボタンを見た。どれも一緒に見分けがつかない。とここで、ワニが寄り添ってきた。それを見て何かをひらめいた。

「そうか！このワニは運転手だった！このワニにしてもらえば・・・」

そついうと、ワニを持ち上げようとした。かなり重い。一体何キロあるんだよってほど重かった。全く持ちあがらない。渾身の力を入れるが全く動く気配がない。とうとう、腕が悲鳴を上げ始めた。限界に達していた。

「くそつ！重い・・・どうしたら・・・」

「グワツ・・・」

「え？」

「グワツ・・・グガツ・・・」

何かを伝えたいようだが、全く伝わらない。耳を凝らして聴いてみた。

「ガツ・・・ガア」

「え？どういう事？・・・ガ・・・ガ？・・・ガガ・・・あか・・・赤！？」

ワニはその答えに首を縦に振った。潤一は急いで赤のボタンを探し

た。そして運転台の端に赤いボタンがあった。潤一はこれだと思いつきボタンを叩いた。すると、急ブレーキがかかった。そして電車は数100メートル進んだあと、停車した。

「やった……やったよ……」

潤一は運転台の椅子に座り込んだ。

「教えてくれてありがとうございます」

「グウ……」

「やったか、潤一」

利幸が潤一に駆け寄ってきた。

「ああ、なんとかな」

「すまない。あいつはもう逃げてた……」

「そうか……」

しばらく沈黙が流れた。車内は喜びの声が上がっていた。

*

その後、潤一と利幸は駅員や取材陣に話しを聞かれた。車内の様子だとか、どうやって止めただとか。しかし、取材陣が一番気になっていた事は消えた運転手の事だった。ワニになった運転手は潤一が傍にあった川ににがしていた。もし、ワニが見つければ捕まってしまうのは当たり前だ。それはちょっとかわいそうだったため、このような行動をとった。取材等が終わると、潤一は利幸と別れ、誠二のお見舞いへと向かった。しかし、誠二は会いたくないと拒むだけだった。嫌な予感はしていた。ただ、無理に会うのはよくない事。潤一はゆっくりと誠二の家を離れた。

その日の夜。ニュースは話題が主題となっていた。分かるように、あの暴走列車の事だ。勿論、潤一も利幸も映っている。どうも、複雑な感じだった。思わず苦笑い。とここで速報が入ってきた。

【速報です。現在、全世界で動物が大量発生するという怪事件が発生しています。それと同時にいくい不明者が続出しているとのことです。原因は分かっています。引き続き捜査が行われる模様です】

潤一は急いで自分の部屋に戻った。そして、パソコンを開いて先程の事を調べてみた。そこには怪事件。大量発生する動物。それと同時に消える人間。という文字があった。頭の中では悪い予想しか出なかった。これも、あの運転手と同じ事なんだろうかと思っていた。

「……これは一体どういう事なんだろう……」

*

「や、やめる！うわああああ！」

「た、助けて・・・お願い・・・おねが・・・きやああ！」

ほかの地域ではあちらこちらで人が動物へと変えられていた。それは日本にとどまらず、アフリカ大陸、オーストラリア大陸、アメリカ大陸でも同じ事が起きていた。殆どの人間は姿を動物に変えられていく。中には精神までもが動物と化してしまった人もいた。

「やはり、人間はこれほどのものか・・・大したことはなかったな」

「まあ、俺様達にかかれば、こんな奴等すぐに片付くつてやつだ」

「ほんと、その通りだね」

「・・・ラジオが使えない。情報源も限られてきたか。思った以上に深刻な状況になっているようだな・・・」

家には潤一ただ一人だった。父も母も弟も姿がなかった。これも嫌な予感しかしなかった。でも、くよくよ考えてもしょうがない。今はとにかく情報を集めることと、あの獣人らしき存在の目的を知る事だ。しかし、潤一の身体は既に疲れ切っていた。

「・・・情報収集は明日にしよう・・・学校はまず無理だろうな・・・
こんな状況になれば。明日どうなっているのだろうか・・・」

そう思いながら静かに眠りについた。

1 3 迫りくる衝撃

時刻は深夜3時を回っていた。潤一はぐっすりと眠っていた。しかし、静かな時は一瞬で吹き飛んでしまう。突然、外で爆発音のような音が響いた。その音に飛び起きる潤一。ベッドから落下し頭を打った。

「いつて~~~~！」

頭を抑えながら立ちあがった。さっきの音はすぐ傍で起きたようだった。急いで、カーテンを開け外を見た。そこには驚くべき光景が広がっていた。

「・・・一体どういう事だ」

目の前には炎上するビルや、瓦礫の山が広がっていた。その中、悲鳴のようなものが聞こえてくる。

「うわわ！助けてくれ〜！誰か助けてくれ〜〜！」

「いや〜こんなんで人生が終わりたくない〜〜！」

悲鳴は途中で言葉とならないものとなっているものもあった。潤一はある事を思い出した。そう、動物が大量発生し、人間が行方不明となる事件の事だ。その証拠に、人間を襲っているのは獣人と思われる生物だった。犬や猫、兎、馬、牛など、中にはイルカやヘビなどもいた。獣人たちは人間に何か薄緑のオーラを放っていた。それを浴びた人間はほとんど動物化していく。人間は行方不明となった訳ではない。全世界で、人間が動物に変えられていたのである。そ

の光景を潤一はただ見ていることしかできなかった。とここで、一匹の獣人がこちらを見た。潤一は咄嗟に姿が見えないようにしゃがんだ。息を殺して静かにしていた。獣人は気付かずにほかの人間を襲った。とここで、潤一の携帯が鳴り響く。潤一は周りに獣人がいない事を確認し、カーテンを閉めると、携帯を開いた。

「利幸からだ！」

相手は利幸からだった。すぐに電話した。利幸も今の状況を知っているらしく、戸惑っていた。

「お、おい！潤一。ど、どうなっているんだよ」

「どうやら、獣人が人間を襲いに来たみたいだ・・・」

「ど、どうすれば」

「とにかく、家から出るな。あと、物音ひとつ立てるな！気付かれたらおしまいだからな」

「わ、分かった」

利幸が理解した事を確認すると、電話を切った。そして、ベッドの上で静かに待機していた。外では悲鳴や動物の鳴き声が絶え間なく聞こえてくる。中には獣人の声も聞こえる。

「お前らには動物になってもらった方がやりやすいんだよ」

「これから、この世界は私達の第2の世界になるのよ」

(第2の世界・・・だと?)

その言葉に耳を疑った。第2の世界と言う事は別にこいつらの世界があるという事だ。つまり、獣人はこの地球に元々いた訳ではなく、どこか別の惑星からこの地球に乗り込んできた木と言う事になる。それはつまりだ。獣人＝宇宙人となる。

「宇宙人の侵略・・・これは笑いごとじゃないな・・・でも俺にはどうする事も出来ない・・・」

確かに潤一だけでは力不足だ。すぐに獣人にやられてしまう。今はとにかく、あいつらがこの町から去る事をただ祈るばかりだった。

*

午前6時。辺りは静けさが漂っていた。潤一はゆっくりとカーテンを開けた。そこには獣人の姿はなかった。炎上していたビルの火は完全に鎮火していた。しかし、辺り一面瓦礫の山であった。まるで、大きな地震が襲ったかのように。潤一は私服に着替えると外に出てみた。

「副田町が、大変なことになってしまった」

住宅だった場所は道すらなくなっていた。駅も倒壊し、大きなビルも傾いている。電車は脱線など大きな支障はなかったが、窓ガラスが全部割れていた。被害の爪痕があちらこちらに残っていた。そし

て、人間は全くいない。代わりにいたのは無数の動物。四方八方動物だった。動物の中には草食動物と肉食動物が一緒にいるあり得ない光景や、その逆で弱肉強食の世界を表している動物もいた。多分その動物は精神も動物化してしまっているようだった。正直なところ、ここは危ない場所である。

「ここにいたら、いつ死ぬか分からないな・・・」

ブルルルルッ

とここで持ち歩いていた携帯が鳴り響いた。メールが届いた様だった。相手は誠二だった。

「誠二からか。一体なんだろう」

潤一は携帯を開いてメールの内容を確認した。そこにはこう書かれていた。

【潤一・・・今まで僕と友達でいてくれて・・・ありがとう。僕の身体は今、ツバメに変貌している。もう、君と会えないかもしれない。精神面までツバメとなってしまうたら・・・確実に会えないだろう・・・。だから、その事を考えてこのメールを送る。本当にありがとう】

最後までちゃんと打たれていなかった。途中で急変したのだろう。そして、咄嗟に送信ボタンを押して、メールが潤一に届いたのである。1つ言える事はある。友達を1人失ったという事だ。そのメールを読み終えた途端、利幸から電話が来た。どうやら無事の様だ。潤一は急いで出た。

「もしもし！利幸か？」

「ああ、お前は無事の様だな・・・」

「ああ、無事だ。ただ、誠二はもう手遅れだ・・・」

「・・・そうか。こんな状況で皆が無事だという事は全く考えていなかったが、誠二が・・・」

しばらく沈黙が続いた。利幸はこれからどうするのかと質問してきた。

「これからどうするんだ？」

「俺は・・・とりあえずお前と会いたいと思っているのだが」

「それが一番妥当なのかもしれないな。よし、今からそっちに向かう。俺の家はもう使い物にならない。お前の家は大丈夫なんだろう？」

「ああ、なんとかな」

「じゃあ、今からそっちに向かう」

そついうと電話を切った。潤一は急いで家に戻った。

*

30分後。利幸が潤一の家に着した。潤一は利幸をすぐに2階の自室に連れ込んだ。そして、窓越しに外の様子をうかがっていた。肉食動物が襲ったのであろう小動物の死体が横たわっていた。血が滲み出ている。こうなると、人間の意識はあっても食料のために相手を襲ってしまうのであろう。その事を考えると2人とも身震いした。

「こんな状況・・・想定していたか？」

「そんな訳ないだろ？こんな言うならば非現実的だ。普通は起こっちゃならない事が起きているんだよ」

「・・・そうだよな。でも、これを受け入れない訳にはいかないだろ？」

「まあな・・・」

とここで潤一が何かに気付く。向こう側に2足歩行の影を見つけた。人間？いや違う。獣人だった。しかも10匹ほどいる。獣人たちは真っ直ぐ潤一の家に向かっている。

「まずい！獣人が来た。カーテン閉める！」

2人は急いで1階と2階のカーテンを閉めた。そして、玄関や窓には鍵をした。そして、自室に戻って、息を潜めた。獣人の足音が少しずつ近づいてきている。そして、家の目の前で音が止まった。

「本当か？まだ、ここに人間がいると言うのか？」

「ああ、そんな感じがするんだ。何処かにいるかもしれない」

(くっ・・・あいつ等の感は何で的確なんだよ・・・)

(そんな事より、このままじゃ、見つかってしまっくんじゃないのか?)

ガシャン

急に何かを突き破った音がした。それは獣人がこの家の玄関の扉を突き破った音だった。利幸は焦りに焦り、大声を出そうとした。しかし、潤一が止めた。

(ここで大きな声を出したら確実にばれるぞ！)

(じゃあ、どうすれば・・・)

(はやく・・・押し入れに入れ！)

利幸は言わるままに押し入れに入った。そして、潤一もその押し入れに入り、戸を閉めた。しばらくして、潤一の部屋のドアを開け、犬・馬・虎の3匹の獣人が入ってきた。

「ここから感じるのか・・・よし、くまなく探せ」

そついうと3匹の獣人は手分けして探し始めた。机の下、ベッドの下、本棚の裏。隅から隅まで搜した。そして、虎の獣人が押し入れに手をかけた。そして、戸をあけた。そこには誰もいない。布団を取り出して、奥の方も見た。しかし、そこには誰もいない。

「ここにはいないのか・・・」

そういうと3匹の獣人は部屋を後にした。その後、家の中を探索したが2人を見つげる事は出来なかったようだ。獣人たちはただの勘違いだと思い、その家を後にした。物音一つしなくなると、押し入れの下段の床がゆつくりと開いた。そう2人はこの空間で身を潜めていたのだ。

「ふう・・・お前の家ってこんな造りがあつたんだな」

「まあな。これがあつてよかったよ。もしなかったら、完全に見つかつていたな」

*

その後、2人は近くのスーパーから食料を調達してきた。勿論、獣人に見つからずにだ。と言つても周りに獣人の姿は全くなかった。きつと別の地域を襲っているのだろう。そんな事を考えながら、スーパーから取つてきたサンドイッチを頬張る。辺りは暗くなるが、明かりは付かない。電気が通っていないのだ。しかたなく、懐中電灯を明かりがわりにしていた。情報を得る事も出来ない。何せインターネットも接続不可能な状況だからだ。できるのは携帯電話を使つての通話だけだった。

「これじゃ、被災地の状況と変わらないな・・・」

「そうだな・・・にしても、何で獣人たちはここを襲ってきたんだろっ・・・。惑星はいつぱいあるのにな」

「何故って、ここは別の惑星とは違って水と空気があるからだろ？ 多分その2つを兼ね揃えた惑星を探していたんだろ。そして運悪く地球が見つかったという事になる。今はそうとしか言えない」

潤一はオレンジジュースを飲みながら言った。利幸は少し恐怖感を覚えていた。

「生存者は・・・俺達だけなのだろうか？」

「さあな？ここに生存者がいる確率は1%にも満たないだろうな」

その言葉にため息をつく利幸。こんな状況に陥れたのは初めてだから、完全に焦りが出ていた。それは潤一にも言えることだった。表情は落ち着いているが、内心は相当焦っている。ただ、ここで自分が焦ってしまえば利幸は発狂してしまうかもしれない。ここはとにかく冷静を保とうと考えたのだ。

「とにかくだ・・・明日はこの地域を探索してみよう。もしかしたら生存者がいるかもしれないからな」

「そうだな・・・今できる事はそれしかないしね」

「まあな」

2人は明日の事についての話を終えると、懐中電灯の明かりを消した。そして、ゆっくりと眠りについた。そんな中でも、人はほとんど動物にされている。その事を考えると眠れない潤一。利幸はすっ

かり眠ってしまっているが、潤一は目が冴えて全く眠れない。体を起こして、カーテンを開けた。月が光り輝いていた。その光はまるで家を照らし出しているかのようにだった。その月をしばらく眺めていた。その姿を密かに見ていた影に気付かず、潤一は眺めている途中で夢の中に入って行った。

1 4 逃走の結末

翌朝の早朝。2人は生存者を探すため、朝早くから起き、外を探し回っていた。しかし、辺りは崩壊した家々やビルと無数の動物しか見当たらない。この辺の動物は人間の時の意識を持っている者が多く襲ってくる事はないが、中には完全に動物化している者もいる為細心の注意を振り払って搜索している。もし、気を緩めて完全に動物化した肉食動物に襲われれば命の保証はない。その為、武器として鉄の棒を持ち歩いている。2人は瓦礫の下や、崩壊寸前の家の中なども調べて見た。しかし、人間らしき存在は発見できなかった。

「やっぱ、俺達だけなのか？生存者は」

「見た限りは・・・だな。でも世界は広からな・・・誰か生き残っていてもおかしくはないだろ？」

「そりゃそうだ。つとづか生き残っていてほしい。その方が希望持てるし」

とか何とか言っている矢先のことだった。後ろから何かの気配を感じた。それに真っ先に気付いたのは潤一だった。潤一は警戒した。

「利幸・・・誰がいるぞ」

「何？動物じゃないの？」

「いや違う。何だ？・・・この感じは何処かで感じた事がある」

潤一は地面にぽっかりと空いた穴に目をやっていた。そこから何者

かの気配を感じている。潤一と利幸は持っている鉄の棒を構え、何が襲ってきてもいい様に態勢を整えた。持っている手から汗が滲み出て、ぼたりと落ちる。その瞬間、何者かが突然現れた。もの凄い飛躍で宙に舞っていた。

「まずい！獣人だ！」

その影を見て叫ぶ潤一。獣人は持っている槍をこちらに向け襲いかかってきた。咄嗟の判断で、潤一と利幸は攻撃を避けた。地面に倒れたまま、獣人の方を見た。見た限り獣人の数は4匹。しかもどれも、ライオン・ゾウ・ゴリラ・カバと強そうな獣人ばかりだ。

「やばいぞ！逃げろ！」

その言葉と同時に走り出す2人。獣人はすぐに2人を追いかけはじめた。懸命に走るが、足はあちらの方が速い。どんどん距離を縮められてしまう。

「くそっ！このままじゃ捕まる」

「どうすればいいんだ！」

「知るか！俺は何処かの異世界の主人公とは違う！」

そんな事を口々に言っていると、槍が飛んできた。もの凄い勢いで迫ってくる。

「危ない！」

潤一は利幸に飛びつき、そのまま瓦礫の陰に隠れた。槍は潤一の左

足を掠めた。うつすらと血が出ていたが、潤一にとってはこんな怪我は今はどうでもいい。それより逃げなければ、動物にされてしまう。その考えばかりが働いていた。瓦礫の陰に隠れ、攻撃を避けたのはよかったが、すぐに見つかってしまう。

「だあ！見つけた。逃げろ！」

潤一と利幸は再び逃げ始める。しかし、体力の限界が近づいていた。次第に走る速度が遅くなっていく。このままだと捕まってしまう事は分かっていたが、身体が追いつかなかった。ライオンの獣人が何かを取りだした。それは何かの光線を発射する銃だった。ライオンはその銃を利幸に向け、そして発射した。銃から出た光線は利幸を直撃した。

「うぐわっ！」

「しまった！利幸！」

利幸はその場に倒れた。体が麻痺してしまったようだ。

「すぐに捕まればいいものを逃げたりするからこんな目にあうんだよ」

倒れた利幸に獣人が近づく。それを離れた場所から見ている潤一。助けなければ、自分が助けないと利幸は捕まってしまう。しかし、潤一には力不足。あいつらに勝てる事なんて到底無理だ。何か、あいつらの行動を止められれば……。とここで手に持っていた鉄の棒に気付く。4匹の獣人は利幸だけを見ていた。

「これでもくらえ！」

潤一は持っていた鉄の棒を回転させながら投げつけた。獣人は音で鉄の棒が迫ってくる事に気付くが、既に遅かった。先頭にいたライオンの顔に直撃。よろけた獣人はそのまま後ろの獣人を押しつぶした。その結果、4匹の獣人は気絶した。そのころ、利幸の麻痺は大分引いていた。

「利幸！大丈夫か？」

「ああ・・・」

「ここはまずい。はやく、逃げるぞ！」

潤一は利幸を立たせ、逃げた。獣人たちは気絶したままピクリとも動かなかった。

*

現在、2人は大型のショッピングモールの2階に身を潜めていた。今は大変な状況となっている。2人を捕まえようと獣人たちが辺りを歩き回っているからだ。2人は今、大きな商品棚の裏に隠れていた。すぐにはれるかと思っただけ、30分見つからない。

（おい・・・いつまでもここにいる訳にはいかないだろ？）

（そうなんだけど・・・獣人の数が多すぎて身動きができない状況なんだよ）

(見つかったら最期かもしれないからな)

とここで獣人の足音が近づいてくる。2人は息を殺した。足音は2人が隠れた商品棚の目の前で止まった。絶体絶命……。思ったが足音は遠ざかっていく。胸をなでおろした。

(危なかった……。危うく見つかるそこだった)

でもさつきも利幸が言ったようにいつまでもここにいる訳にはいかない。ただ、迂闊に動けばすぐに見つかる。獣人の中には足がとんでもなく速い奴もいる。この中、どうやって逃げるか考えていた。とここで何かに気付く。傍には駐車場に続く階段があった。そして傍には子供が落としたのであろうビー玉が落ちていた。そこである事を考えた。

(一か八かやってみるか)

潤一はそのビー玉を拾い上げると商品棚と反対側に思いっきり投げた。

カチャン

「そつちから物音がしたぞ！」

獣人たちは一斉に音のした方に向かった。

(いまだ！)

2人は獣人がこちらを見ていない隙に階段を使って上の階に逃げた。獣人たちは2人には気付かず、音のした方ばかりを探していた。

「うまくいったな」

「お前、結構無謀な事するよな」

「こうでもしないと逃げられないだろ？」

しかし、新たな問題が立ちはだかった。出口に続く道が崩壊してなくなっていた。ここは3階。とても飛び降りて逃げられるような高さではなかった。もし、飛び下りれば確実に足を怪我してしまう。こんな状況で怪我でもすれば命取りだ。

「こ、この事までは想定していなかった」

「ど、どうするか？引き返す訳にはいかないぞ？」

建物内は獣人で埋め尽くされている。中を通って逃げるなんてできる訳がない。2人に焦りが出てきた。この状況、どうすれば解決されるかを考えた。しかし、いい案が浮かばない。必死に考えた。と
その時だった。

ドガッ

バキッ

「うぐわっ！」

「ぎゃあー！」

2人は背後から来た獣人の存在に気付かず、鈍器のようなもので殴

られた。衝撃が大きかったのか2人はそのまま気絶してしまった。

*

ここは何処かの部屋。2人はベッドの様な場所に寝かされていた。体を鎖で縛られ動けない状態となっている。2人はまだ気絶している。そこに犬と猫の2匹の獣人が近づいてきた。

「やっと繋がったか。この転送装置は」

「はい、準備は万全だという事です」

「宇宙からでは不便だからな……この装置があればあちらの行き来が楽なる」

そのこの部屋は何かの装置がたくさん取り付けられていた。色々な音が行き交っている。その音に反応したのか利幸が目を覚ました。獣人は利幸が目を覚ました事にすぐ気付いた。

「おや？目が覚めてしまいましたか……」

「うづつ……ここは？って、何だこれ！？何で縛られているんだよ」

「分かるだろ？今からする事ぐらい」

「分かるか！予知能力とかそんな能力持っていないから！」

そんな利幸を無視して装置をいじる猫獣人。何をしようとしているのかかなり気になった。

「これからどうしようっていうんだよ？」

「お前達を私達の世界に送るためだ。その為にこの転送装置を備え付けた部屋に連れてきたんだ」

その言葉に吃驚した。獣人の世界に連れて行くだと？連れていってどうするんだよと思った。考えが悪い方向にばかり傾いていく。

「何でそんな事をするんだよ」

「普通ならすぐに動物にしてやるのだが、お前らはいいい人材だ。実験台にしようと思ってな」

「じ、実験台だと!？」

「大丈夫だ。死んだりはしない」

「いや、死ぬとか死なないとかじゃないだろ・・・」

ドガッ

「ガッ！」

誰かに殴られ再び気絶。殴ったのは獣人のSPの様な存在の奴だった。そのSPは役目を終わると部屋を出て行った。それを確認する

と装置を作動させた。

「それでは、装置始動」

ウィーン ガタガタガタ

大きな音と共に装置が始動し始めた。そして、部屋中が光ったと思うと2人は姿を消した。

「成功したか？」

2人が転送された後、獣人の世界の方から通信が来た。

「こちら獣人界。転送装置は成功した。これはいい実験台となるぞ」

「成功しましたか。それでは後は任せましたよ」

「了解しました」

そういつと通信は切れた。

1 5 人間としての最期

潤一は気絶から意識を取り戻した。ゆっくりと体を起こした。そして、まだはつきりとしめない意識の中周りを見た。すぐにそこが何処だか分かった。

「ここは・・・牢獄？」

そこは刑事ドラマなどでよくある牢獄の様な場所だった。そう、潤一は捕まってしまうていた。すぐに起き上がって、鉄格子を動かすがびくともしない。扉も鍵がかかっていて開かなかった。

「くそっ！」

潤一は鉄格子を叩いた。その音に気付いたのか警備員と思われる獣人が現れた。狼の獣人だ。何故か威圧感を感じた。潤一は少し焦ったが、すぐにその獣人に出せと大声で言った。しかし、獣人は笑っただけだった。

「はぁ？だすだと？そんなことはできない。お前は実験台1号となつてもらつからな」

「実験台だと？ふざけるな！そんなことしてなにになるんだよっ」

「さあな？それは実験されてからののお楽しみだろ」

「そんな楽しみあるかよ！」

「まあ、実験の時が来るまで待っているんだな」

そういうと立ち去った。必死に呼びとめようとしたが、その場を後にしてしまった。潤一は牢獄の中にある長椅子の様な所に腰をかけた。そして、ある事に気付いた。

「利幸・・・利幸がいない！？あいつは何処にいるんだ？別の牢獄にいるのか？」

潤一は周りの牢獄を見た。しかし、潤一の入っている牢獄以外は誰も入っていないかった。つまり、今ここにいるのは潤一だけだということになる。

「あいつら、俺達をどうしようっていうんだよ・・・それに実験って何の実験なんだ？」

そんな事を考えていると、足音が聞こえ始めた。それは少しずつ近づいてくる。そして、姿を現した。やはり獣人だった。今度はシャチとサメだ。このコンビ嫌だと真っ先に思った。

「さあ、出るんだ。実験被験者さんよ」

「んな呼び方するな。俺には八幡潤一って名前があるんだよ」

「そんなこと知るか。とにかく出る。さもないと食っちまうぞ？」

その言葉には正直逆らえない。潤一は渋々牢獄を出た。出た途端に腕を後ろで組まれ縄で縛られた。

「やっぱりこうするか・・・逃げられない様にか」

「さあ、歩け。実験室まで連れて行く」

「押さなくても歩くって！」

潤一は抵抗することなく、実験室へとついに行く。そして、実験室内部。そこには多くの獣人と巨大な装置があつた。見るからに怪しいカプセルの中にゼリー状の何かが入っている。紫だから尚更嫌だ。目を細めてみると、一匹の獣人が近づいてきた。スズメの獣人だ。潤一は睨みつけるような眼差しで見っていた。

「おや？どうしたんだい？そんなに怖い顔をして？」

「言わなくても分かってるくせに……」

「なかなか威勢がいいじゃないか。実験にはぴつたりだ」

「だから、その実験はなんだよ」

スズメの獣人は笑っていた。何かおかしいのか潤一は理解に苦しんだ。大きなため息をつく。獣人の笑いのつぼは一体何だろうと考えていた。

「この実験はだな。人を獣人にする装置だよ」

「……はい？」

思わず聞きなおしたが、内容は理解できていた。つまりだ、人間をお前らと同じ姿にするっていう事だよな？そんなことしてなにになるんだと真っ先に思った。

「動物に変えた人間はだな、骨格が変形して体自体が動物になったと思われているがそれは違う。人間の身体は別の空間を漂っているだけだ。したがって、人間の身体自体が変化した訳ではない」

「・・・はあ？」

「ようするにだ。人間の精神を動物に入れ、抜け殻となった人間の身体を別の場所に置いたという事だ。しかし、獣人となれば、そうないかなくなる。獣人は人間の外見と動物の外見を持ち合わせた存在だ。この実験では、お前の身体に動物の素を入れる。それによって、獣人と化するのが。でも心配はいらない。これは確実に人間の精神を奪う事はない。その方が、奴隷としては最適だからな」

「ふっざけるなよ！人間は獣人の道具じゃねえんだよ！好き勝手使われてたまるか！」

「ごちゃごちゃうるさいですね。すぐに実験を始めよう」

潤一は必死に抵抗するが、相手に力は計り知れないほど強い。60キロ前後ある潤一の身体を片手で持ちあげた。暴れ回るが、あまり意味がない。そして、カプセルの中に放り込まれた。不思議な事の中で息ができる。このゼリー状のものは一体何に使うのか疑問に思った。

「これはまだ、やった事がない実験ですからね・・・失敗するかもしれませんね」

「ふっざけ過ぎだろ！」

「最初は失敗するだろうから、この架空の動物の素でも入れてみようか。君、頼む」

「分かりました」

スズメの獣人は動物の素が入った容器をツバメの獣人に渡した。その容器は機械にセットされた。プルグラムを入れ込むと、準備ができたらしく、ツバメの獣人が、手を挙げた。

「よし、実験を開始する」

「やめろおおおおおおお！」

スズメの獣人はスタートボタンを押した。その瞬間、装置が動き始めた。大きな音と共に。そして、準血の入ったカプセルの中に何かの液体が入れ込まれた。その液体は潤一を包んだ。その瞬間、変化が訪れた。

「うぐわあ！く、苦しい！助けてくれ・・・」

「おお・・・これは、もしかして、1発目で成功してしまうのか？」

「ああ！苦しい！うぐわあ！」

潤一に変化が訪れた。体全身に銀色の鱗が現れ始めた。それを見て焦る潤一。

「うわあ！？鱗が！鱗が！」

変化は止まらない。腹は蛇腹の様になり、腕にも鱗が現れた。そし

て、指の数が5本から3本になった。指の先には鋭い爪が生えた。足も同様に指が3本になり、鋭い爪が生える。ズボン突き破って、シップが現れた。銀色の鱗に包まれたとても太い尻尾が。

「ゲガア！ウゲアア！」

苦しみのあまり、自分の容姿を確認する余裕もなくなっていた。そして、変化は顔にも表れた。顔は前に伸び、後頭部からは小さな角が2本、大きな角が2本生えた。歯は鋭い牙に生え換わっていた。目は鋭い目つきにへと変わっていった。髪は全部抜けてしまっていた。そして、最後に背中から巨大な蝙蝠の様な翼が生えてきて変化は止まった。

「これは誤算だったな。1発目で成功してしまうとは。でもまあいい。これでこの装置は完ぺきな装置だという事が分かったのだから」
そういうと、潤一をカプセルから出せという指示を出した。指示通り、変わり果てた潤一をカプセルから出した。潤一はその場に倒れる。まだ苦しんでいた。

「ウゲウ・・・ク、クル・・・シ・・・カッタ・・・ア・・・レ？
コ・・・エガ・・・」

潤一は自分の声が出にくい事に気付く。そして、自分の手を見て絶句した。それはもう人間の腕ではなかった。それに足も、身体もだ。そして、一番違和感があったのは背中の翼と尻尾だった。今までないものが身体にあると変な感じになってしまうようだった。

「おめでとう。君は素晴らしい。獣人・・・いや、その容姿は竜人と言うべきかな？」

「リュ・・・ウ・・・ジン？」

竜人とは、獣人とほぼ同じであるが、竜の姿をしている。その為、竜の姿をした獣人を竜人と呼んでいる。自分の姿を見た潤一は絶望した。もう自分は人間ではない。しかももう元には戻れない。竜人となった潤一の眼からは一筋の涙がこぼれた。

1 5 人間としての最期（後書き）

できれば、感想や評価をよろしくお願いしますっ

竜人と化した潤一はその後、あの牢獄へと戻された。暴れないようにと、首には鎖がつけられていた。潤一はぐったりとしている。まだ、自分の姿を受け入れる事ができていなかった。暗い牢獄の中、冷たい風が吹き抜けている。牢獄の1つ1つには小さな窓の様な穴があいている。しかし、今は窓から外をのぞく気になんかなれない。ただ、長椅子の上に座って、完全に壁に凭れかかった感じとなっていた。

「オレ・・・ハ・・・ドウ・・・ナツテ・・・シマ・・・ウノカ」

まだ、片言の様なしゃべり方しかできなかった。しばらく、俯いたままだった。しかし、何処から怒鳴るような声が聞こえてくる。その声は徐々に近づいてくる。

「この！放せ！俺をどうする気なんだよ！」

この声には聞き覚えがあった。その声の主の顔が出る前に牢獄の前に姿を現した。利幸だった。利幸はシャチの獣人とサメの獣人に捕まっていた。牢獄の方は見えずと獣人に向かって叫んでいた。

「お前ら！こんな事をして何になるっていうんだよ！俺にはやる事があるんだよ！」

「煩い！黙ってここに入りやがれ」

利幸は強引に牢獄の中に放り込まれた。利幸は鉄格子を揺らした。

「くそっ！ここから出せよ！」

「おや、そんなに牢獄が嫌なのか？ここには特別に2人入れてやっているのによ？」

「2・・・2人？」

利幸はゆっくりと後ろを見た。そこには竜人となった潤一の姿があった。しかし、利幸はまだその竜人を潤一だという事は知らなかった。吃驚して腰を抜かしていた。

「あゝあゝ！りゅ、竜！？竜人か！？ちょ、お前ら！何でここに俺を入れたんだ！出してくれよ！食われちまうよ！」

腰を抜かしたまま、必死に鉄格子を揺らしていた。潤一はそんな利幸を呼んだ。

「トシ・・・」

「!?!?えっ？」

「トシ・・・ユキ・・・」

竜人が自分の名前を呼んだ事に吃驚した。何故自分の名前を知っているんだと疑問に思った。と同時に恐怖も感じた。さらに焦る利幸。

「な、何でおれの名前を知っているんだ！？この竜人は？」

「まだ分からないのですか？」

「そいつは・・・実験に成功し竜人と化した君の友達だよ」

その言葉に一瞬で凍りつく利幸。そして、竜人の方を見た。今日の前にいるのは変わり果てた友達。信じたくなかった。そんな事あつてはほしくない事だった。

「そ、そんな。そんなはずはない！潤一は・・・お前ら何かに容易く姿を変えられるなんてそんなへまはしないはずだ・・・」

「まだ、受け入れないのか？これは事実だ。その竜人は紛れもなくお前の友達だ。といつてももう人間の姿を見ることは不可能だね」

「ど、どういう事だ？」

「動物になった者は簡単に戻すことはできるが、獣人・竜人になった者は二度と戻らないのさ。意識があつた時にじっくりと見ておけばよかったな」

2匹の獣人は笑いながらその場を後にした。利幸の怒りは頂点に達していた。

「ふっざけるな！俺の・・・俺の友達を返せー！ー！」

泣きながら叫んだ。しかし、それは木霊するだけだった。利幸は泣き崩れた。潤一は今まで何度も利幸が泣いているのを見てきたが今泣いている利幸はこれまで以上に泣いていた。そうとう絶望したのだろう。友達がこんな姿に変えられた事はとても辛い事だ。しかし、こればかりは受け入れないといけない事だった。潤一は利幸を呼ん

だ。

「トシ・・・ユキ・・・」

利幸は泣きながら潤一の方を見た。まだ、近づくには抵抗があるらしく、こちらに近づく事はしなかった。

「スマ・・・ナイ・・・モット・・・オレガ・・・チャン・・・トシテレ・・・バ・・・コンナ・・・コトニハ・・・」

利幸は泣きながら答えた。

「俺は・・・潤一を助けられなかった・・・遅かった。もう、二度とお前の人間姿を見られないなんて・・・本当にすまない事をした・・・」

「アヤマ・・・ルナヨ・・・イマハ・・・ナイテ・・・イル・・・バアイ・・・ジャナイ・・・ゾ・・・オマエ・・・ハ・・・ニゲ・・・ナイト・・・ユイ・・・イツ・・・ノ・・・二」

「馬鹿野郎！大切な友達を置いて逃げるなんて俺にはできねエ！ここから逃げるときはお前も一緒だ！潤一！俺達は友達だ！たとえ姿が変わったとしても、絆で結ばれているんだよ！」

泣きながらの言葉。その言葉には潤一も笑みを浮かべていた。こんな姿になった自分をまだ、友達だと思ってくれる利幸は最高の友達だ。潤一はそう思っていた。そして、潤一は元気をもらった。その場から立ち上がって、利幸に寄った。

「潤一・・・かっこいいよ」

泣いているのか笑っているのか分からない表情で一言。

「アリガ……トウ」

利幸は潤一に抱きついた。潤一も抵抗せずに抱きしめた。そして、利幸から出た一言。

「……………痛い！痛い！痛い！痛い！」

「……………エツ？」

「鱗！鱗刺さってる！サメ肌みたいに！痛い！」

自分の身体に鱗がある事をすっかり忘れていた。包丁の様に鋭い鱗は利幸の服を裂き、皮膚に傷をつけていた。少量ではあるが、あちこちから血が出ていた。

「ダ、ダイ……ジヨウブ？」

「痛いけど、大丈夫だ。友達と再会できたことの方が上回っているから！」

1人と1匹は向き合って笑っていた。

*

その日の夜。今日はもう何もなければらしく牢獄は静けさが漂っていた。

潤一は大分喋れるようになっていた。窓の様な穴からは月の光が差し込んでいた。この獣人界にも月はあるんだなと感じた。1人と1匹は月を眺めていた。会えた嬉しさとこれからどうなるかの不安を抱いたまま。

「潤一……」

「ナンダ？」

「お前と最後に月を見たのはいつだったっけかな？もう随分前だったよな」

「イツダツタカナ？俺達ガ幼稚園ノトキダツタカナ？」

「その時お前、『この月を1人で食べるのが僕の将来の夢なんだ！』なんて言ってたよな」

急に顔を赤める潤一。そんな事を言った記憶はなかったのだが、利幸はしっかりと言ったと言っている。

「お前もそんなときがあったんだって、この月を見て思い出したよ」

「ハハ、ソナナ過去ガアツタノカ……。俺ハ全ク覚エテイナイヨ」
笑いながらそう言った。利幸は急に身体を起こして、椅子の上に乗った。そして、窓から外を見てみた。そこには人間界と同じように家やビルが聳え立っている。ただ、車や飛行機、電車など乗り物は一切なかった。

「この世界も人間界に似ているんだな。まあ、獣人だからな。似てもおかしくないよね」

ゆっくりと、椅子から下りた。そして、潤一の傍に座った。

「デ、コレカラドウスルンダ？」

「とりあえずだ。今日は休んだ方がいいと思うな。あまり、夜に騒ぐとすぐに見つかってしまう事があるからね。逃げるタイミングを待っていた方がいいと思う」

その案に潤一は否定しなかった。利幸を信じていたからだ。何せこの自分を信じてくれるからだ。潤一はゆっくりと首を縦に振った。理解を得ると、利幸は横になり、夢の中に入った。その笑顔を見て笑う潤一。潤一もゆっくりと眠りについた。

*

一方ここは人間界。三日月が辺りを照らし出していた。瓦礫の山は撤去される事もなくその場にとどまっていた。そして、ここは副田町から数百キロも離れた飯浜町^{いいはままち}。ここも、襲撃を受けたらしく瓦礫の山が続いていた。その瓦礫の山に開いた穴に身を潜める者が開いた。

「獣人は・・・もういなくなつたよな？」

出てきたのは紛れもなく人間だった。彼は福田靖^{ふくだやすし}。実は潤一達とは友達の関係にある。親の仕事の都合でこの町に引っ越してきたのだ。

しかし、その直後、このような襲撃を受け、今は1人この瓦礫の山の中、生存者を探していた。

「何処を見ても動物だらけだよな・・・皆姿を変えられたのかな？
なあ、どう思う？優子よ・・・」

優子とは靖の妹である。その妹は今、靖の頭の上にいる。そう、妹の姿はいまカナヘビである。小さな舌を出しながら、頭の上に乗っていた。

「・・・・・・・・」

「まあ、言葉を発することはできないよね・・・この状況・・・どうしたらいいんだ？」

とにかく立ち尽くす。その日の夜は一晚中瓦礫の山の上に立っていた。

1 6 絆（後書き）

中間は仄々。最後の方は新たな生存者のお話でした。なんかグダグダになってきた・・・。

評価・感想など、待っていますw（殴

2 1 新たな生存者（前書き）

これは潤一や利幸達とは別の生存者の話です。

2 1 新たな生存者

翌朝。太陽がゆっくりと昇ってくる。辺りは次第に明るくなり、空も夜空から青空になっていく。一晚瓦礫の山の上で佇んでいた靖はゆっくりと瓦礫の山を降りた。生存者を探すためだ。この辺の町は人口が多いから生存者がいるはずと、朝から搜索を始めたのだ。しかし、探すも探すも見つかるのは動物ばかり、途中でワニと遭遇して襲われそうにもなった。時間はあっという間に過ぎ、もう昼前となった。靖は2日前から何も食べてはいないが、元気であった。靖は空腹をあまり感じない方だった。

「はあ、何処にもいないな。自分だけか？生存者は」

と思った矢先だった。瓦礫の中からうめき声が聞こえてきた。その声は動物の鳴き声ではなく、人の声に近かった。靖はすぐに声のする方に駆け寄った。瓦礫の中から聞こえてきた為、山となった瓦礫を1つずつ取り除いていく。しかし、瓦礫は重く、なかなか作業が進まない。しかし、必死になり、瓦礫を運んだ。そして、瓦礫の中に男性の顔を確認する事ができた。その後も撤去していき、男性を救出することに成功した。体中には傷があり、出血しているが、意識ははっきりとあった。

「あ、ありがとう。助けてくれて」

「いえ。当然の事をしただけです」

靖はその男性が何者かはすぐに理解した。自衛隊だった。きっと、ここで生存者の救出をしていたみたいだ。男性はゆっくりと体を起こした。

「君は……この町の生存者か？」

「は、はい。そうです」

「そうか……もう、ここにいるのは君だけかもしれない……」

その言葉に驚いた。

「ど、どうしてですか？」

「俺は……人間が動物と化していく所を見てきたんだ。そう、この町の住人達が目の前でだ。あれははつきりいつて残酷だった。獣人共は何の躊躇いもなく人間を動物にしていくんだ。こんな事、会ってはならない。奴等は自分のことしか考えていない奴らだ」

男性は拳に力を入れていた。それを見ていた靖は心の中で思っていた。どんなに辛い光景を見てきて、どんなに辛い思いをしたんだろうなど。靖はしばらく、言葉を発する事ができなかった。

「そういえば、お前の名前は何と言うんだ？ 因みに俺はおのこ小野崎進、28歳だ。生存者同士よろしく願いたい」

「自分は、福田靖。この町の高校2年です。こちらこそよろしくお願ひします」

深々と礼をした。その行動に進は笑いながら言った。

「そこまで、礼儀正しくなくていいんだぞ？ 今は生きる事が大事だからな」

そういうと、男性は立ち上がった。胸ポケットから銃と銃弾を取り出した。それを見て驚く靖。本物の銃は初めて見た。

「それ・・・本物の銃ですか？」

「ああ、そうだ。と言ってもこの銃は威力が低いハンドガンだ。戦力になるかどうかは分からないが、持っていないよりはましだと思つてな。自衛隊として、もっていないと戦えないからね」

そう言いながら、銃弾をセツトした。2人は常に周りを警戒した。動物でもいつ襲ってくるか分からない。2人はともに行動することとなった。

*

日が落ち、辺りはゆっくりと暗くなっていく。靖と進は瓦礫の下にいた。幸いにも進は小さい懐中電灯を持っていた為、明かりには困らなかった。しかし、周りへの警戒は解かない。

「やはり、いなかったか。ここまで探していないとなると、もうここはだめかもしれないな」

「そうかもしれませんが・・・。自分も親は動物にされ、妹も今は自分の頭の上です」

「頭の上？」

「優子。出ておいで」

そういうと、後のフードからよじ登って頭の上に乗った。挨拶をするかのように舌を出した。

「そのカナヘビが君の妹か……。その様子だと人間の意識はあるみたいだな。俺が会ってきたのは完全に動物化した奴らばかりだ。それも仲間であった奴までも俺を襲ってきやがった。畜生！仲間を守れなかつたよ！」

地面を思いつきり殴った。傍の瓦礫が少し落ちてきた。

「獣人がしたい事は一体何なのでしょう？この世界を征服するとかそういう事なのでしょうか？」

「多分な」

その時だ。近くで物音がした。足音だ。しかも、小動物とかそういうものではなかった。2人は構えた。瓦礫の山の陰に身を潜めた。次第に近づいてくる。進が勢いよく飛び出した。しかし、そこには誰もいなかった。しかし、靖は気付いた。

「進さん！上！」

進は上を見た。そこには槍を片手に襲ってくるチーターの獣人の姿がいた。進は身を翻した。間一髪、攻撃を避ける事ができた。しかし、獣人はすぐに襲ってきた。相手の行動は速く、追いついて行けない。進は振り回された槍を顔面に食らってしまう。

「ぐはっ！」

進は地面を滑るようにして倒れた。体力をかなり消耗していた為、立つ事もままならなかった。

「おやおや、もうお疲れですか？」

「き、貴様……」

「そんなに疲れているのなら、動物にしてあげましょうか」

「ふざけるな！誰が動物なんかになるかよ！」

「そうか……動物になるのが嫌なら……死ぬ」

そういうと、槍を真っ直ぐに構え、進むに向かって投げつけた。勢いよく進に飛んでくる。進は身体が言う事を聞かず、避ける事ができない。

「もう……だめか……」

しかし、槍は何かにはじかれ、地面に落ちた。獣人は慌てて、槍に放たれた物を見た。それは瓦礫の破片だった。

「簡単にあきらめちゃいけないよ」

投げつけたのは靖だった。靖は今度は獣人に向かって破片を投げつけていく。それも1つではなく幾つも投げつける。獣人は慌ててその破片を避ける。

「貴様！俺様の邪魔をしゃがって！」

「邪魔するのは当たり前だ！仲間が目の前で死ぬなんて嫌だよ！」

「そうか、じゃあ貴様からやってやる！」

そういうと真っ直ぐに靖の方に突っ込んでくる。靖は何故か動かなかった。

「靖！避ける！殺されるぞ！」

しかし、靖は動かなかった。獣人と靖の差はどんどん縮まっていくな。そして、鋭い爪で引き裂こうとした時だった。靖は身かわして、獣人の腕を掴んだ。

「何！？」

「ウラァ！」

そのまま、反対の手で胸元を掴み、地面に叩きつけた。見事な背負い投げだった。獣人はそのまま気絶した。

「ふう……」

一息つく靖。その靖に進が駆け寄ってきた。

「君は何かやっていたのか？」

「これでも、柔道をやっています。今年も町内の大会で優勝しましたよ」

その言葉に半ば驚く進む。しばらくした後、2人はその場を離れた。また、襲ってこられると今度はやられかねないからだ。暗い道を黙々と進んでいく。そして、大きな川のところまで来た。傍には大きな橋があり、下に隠れられそうな場所があった。今日はそこに寝ることにした。しかし、靖と進は眠る事ができなかった。いつ襲ってこられるか分からない為だった。身体を横にしたまま、目を開けていた。川の水が流れていく音しかしない。辺りはひっそりとして何処か無気味であった。カナヘビになった妹の優子は既に眠りについていた。

「すぐに寝つけていいよな」優子は・・・こっちもすぐに寝つきたいよ」

そんな事を言いながら頭の後ろで腕を交差させ、その上に頭を置いた。ここは橋の下だから、空を見ることはできない。かと言って見える場所に行けばすぐに見つかってしまうだろう。

「この世界の中で生存者はいるのだろうか・・・」

そんな事を思いつつ、夜を過ごしていった。

2 1 新たな生存者（後書き）

次回は潤一と利幸の事を書こうと思っています。

感想・評価、できればよろしくお願いいたします。

2 2 敵獣人 仲間獣人（前書き）

もう、ここまで来るとグダグダが激しいです。そのことを踏まえて
どうぞ閲覧してください。

2 2 敵獣人 仲間獣人

時刻、明け方4時。牢獄の中で夜を明かした潤一と利幸。朝の早い段階から起きていた。今日の獣人界の天候は雨だった。冷たい雨粒が降り注いでいる。牢獄からは雨が落ちて行く音がしていた。しかし、今は雨なんて気にしている場合じゃなかった。この牢獄からどうやって脱獄するか考えていた。

「さあて、どうしよう……。何も案が思いつかないからね……。このままじゃ俺も実験台送りだな……」

「大丈夫だ。何ガアツテモ、オマエヲ実験台ニハサセナイカラ」

「……潤一は本当にいい奴だな」

潤一は少し赤くなった。と同時にあのシャチ獣人とサメ獣人が現れた。

「さあ、今度はお前が実験台となる日だ。どうだね？わくわくするだろ？」

「するかボケ！」

「口答えも過度があるからな。怒らせると食っちまうからな」

（また、それで脅す……）

利幸はゆっくりと扉に向かった。潤一も一緒に行くこうとしたが、止められた。そこを動かなくと指示されたのだ。潤一は動かなかった。

下手に動いて利幸に何かあれば行けないと思ったからだ。齒をギシギシさせながら獣人達を睨みつけていた。利幸は開かれた扉の前に立った。とここで突然利幸が叫んだ。

「あっ！」

利幸は獣人の後ろを指さした。しかし、獣人は振り向かなかった。

「お前は馬鹿だな。そんな手に引っ掛かるかと思った・・・ガハッ！」

「グワッ！」

獣人は急に倒れてきた火を灯す柱と、牢獄の鉄格子に挟まれた。そのまま、気絶してしまった。

「だから、“あっ！”と言ったはずだ・・・。時には敵のいう事も聞くんだな・・・」

と言うと、獣人の間を通り抜け、外に出た。

「潤一！はやく」

潤一も牢獄を出た。道が分からない潤一と利幸はとにかく走った。中は迷路の様になっているがそんな事はお構いなしだ。とここで、サイレンが鳴り響いた。

ウイイイイイン ウイイイイイン

【実験被験者が逃げ出した。繰り返す、実験被験者が逃げ出した。

ただちに捕獲せよ】

焦りはするが、足を止めようとはしない。真っ直ぐの道を走っている時だった。前方に獣人たちの姿が見えた。やばいと思った潤一は周りを見た。右に曲がる道があった。

「ミギニイクゾ！」

潤一と利幸は右へと曲がった。今はとにかく逃げる事が最優先だった。とここで利幸がある事に気付く。

「そういえば！ここに来た時、何か変な転送装置見でこの世界に連れてこられたんだ。だから、元の世界に戻るにはそこに行かないといけない」

「ソレハワカッテイル・・・ダケドソレハムリダ・・・」

「え？」

「俺ガ姿ヲ変エラレルマエ・・・他ノ獣人共ガ言ツテタ・・・。今ハ故障シテイテ転送不可能ダト・・・」

「マジかよ！？じゃあ、どうすれば・・・」

「トニカクコノ施設ヲデナイト・・・」

逃げながら、会話をしたせいか、息が早々と切れてしまう。獣人達との距離が一気に縮まる。曲がり角を左に曲がった時。窓が現れた。その窓は外に繋がっている。ただ、ここは高さからして5階。飛び降りて命が助かる保証はなかった。しかし、考えている暇はない。

「ここで獣人どもに姿を変えられるくらいなら・・・っ!？」

利幸は窓ガラスに突っ込んだ。窓ガラスは粉々になり利幸は外に飛び出した。

「トシユキ！」

潤一もあとを追う。潤一も利幸も一気に急降下していく。潤一の背中には翼があるが、今は使い方を知らない。そのまま落下し、下の森林に落ちて行った。それを見ていた獣人はというと、笑っていた。

「馬鹿な奴らだ・・・ここから飛び降りなんてとんだ自殺行為だ。でも、これで、実験台がなくなってしまったな・・・でも、まだ、次の実験が成功するまでは時間がある。それはまではゆっくりできるな」

そついうと獣人たちは引き返して行った。

*

「いって~~~~~!!」

「オマエモ結構無茶スルヨナ・・・」

森林内部。そこには潤一と利幸の姿があった。1人と1匹は無事だった。特に潤一は傷一つなかった。鱗が身体に傷がつくのを防いで

くれたのだ。利幸も骨折などをしていなかった。ただ、足に木の枝が刺さって出血をしていたが、軽傷ですんでいた。潤一はポケットの中に入っていたハンカチを着ずに結びつけた。潤一の姿は竜人であるが、服はそのままである。ただ、翼や尻尾が生えた為、そこは破けているが、着れない服とまではなかった。余談であるが他の獣人もちゃんと服を着ている。と、こんな話はどうでもいい。とにかく今、どうすればいいかを考えていた。

「サアテ・・・ドツチニイクカ・・・」

「どっち見ても木ばかりだね。どっちが北か見当もつかないな。太陽出てないし・・・。おまけに雨降ってるし・・・。」

雨は朝に比べれば弱まってはいるものの、いつ天候が変化するか分からない。だから、一刻も早くここを出る必要があった。

「俺が飛べたらナイインダケドナ・・・」

そう言いながら翼を見た。大きな翼は風を受けていた。

「まあ、すぐに慣れる訳じゃないからね・・・それはしようがない事さ。とにかく歩こう。突っ立っててもしょうがないしさ」

1人と1匹は歩き始めた。何処を見ても風景は変わらない。川でもあれば助かるのだが、そんなもの見えても来ない。30分・・・1時間は歩いただろうか？足は疲れを見せているが、景色は同じままだった。潤一も利幸も次第に歩くペースが遅くなってくる。

「きついな・・・まだ、出口は見えてこないのか・・・」

「ハア、ハア、マダ・・・コノ身体デ体力ヲ維持ハデキナイヨウダ・・・色々ナ所ニカヲ使ツテシマウ・・・」

と思っていた時だった。誰かの足音が聞こえてきた。ここは獣人界。いるとすれば獣人が獣。どちらも今は会いたくない存在だ。足音が近づいてくる。しかし、動く事は出来ない。勿論、逃げる事も出来ない。そして、遂に獣人が姿を現した。その獣人を見て焦りが出る利幸。それは蛇の獣人だった。普通の蛇同様、舌を出したり引つ込めたりしている。蛇の獣人は人間を見て吃驚していた。

「に、人間だ！」

「うわあ！襲わないでくれ！襲わないでくれ！」

利幸は今にも泣きそうな顔をしながらそう訴えた。蛇の獣人はどんどん近付いてくる。利幸は後ずさりをするが途中で躓いて尻もちをついてしまう。傷が痛んだ。

「いたっ！」

「大丈夫か！？トシユキ」

利幸はすぐに立ち上がろうとした。

「動くな！」

蛇の獣人が怒鳴った。利幸はもうだめかと思い、その場に寝転んだ。しかし、意外な言葉が出てきた。

「これくらいの傷なら・・・僕の持っている傷薬で何とかかなりそう

だ。一緒についてきて。僕の小屋に案内するから」

「え？」

意外な言葉に目を丸くしていた。潤一も同様吃驚していた。

「オマエ・・・襲ッテコナイノカ？」

「何で人間を襲う必要があるの？僕は人間が好きだよ。襲うなんてとんでもないよ」

半信半疑だった。これは騙されるのではないかと思ったが、そうには見えなかった。利幸はゆっくりと立ち上がると、ゆっくりとした足取りで、獣人について行った。潤一もゆっくりとついて行く。

*

蛇の獣人の小屋。利幸はそこで治療してもらっていた。その傷薬をつけて貰うと、一気に痛みが消えて行った。今は、走れるようになっていた。

「獣人は悪い奴ばかりだと思っていた。全員が人間を嫌っていると思っていたよ」

「いや、この獣人界には人間を嫌う獣人と人間を仲間と見ている獣人がいるんだ。僕は人間が大好きなんだ。だから、会えてうれしいな」

何とも蛇に似つかわしくない言葉。少々苦笑いだった。

「まあ、助けてくれてありがとう……。ええっと……」

「僕はユタっていうんだ。よろしくっ」

「俺は多々野利幸っていう名前だ。よろしく」

「俺ハ八幡潤一ダ。ヨロシク」

「あれ？そちらの竜人さんの名前は人間みたいな名前だね？」

潤一は俯いた。本当の事を言う事に抵抗があつた。代わりに利幸が事情が説明した。

「潤一は……。人間を嫌う獣人達に実験台にされて……。竜人となつてしまった元人間なんだ」

「え？元人間なの？」

「……。ソウダ……。昨日マデハ人間ダツタ。デモ、モウ俺ハ人間ノ人生ハ終ワツタンダ。コレカラハ竜人ナンダ……。死ヌマデ」

「酷い事をする奴らだ……。人間を簡単に実験台するなんて……」

ユタは怒っていた。大好きな人間が姿を変えられた事が怒りの原因であつた。しかし、すぐに冷静を取り戻した。

「この世界で人間を仲間だと思つている獣人ってどれくらいいるん

だ？」

「どうだろう？総獣人口の約2割程度かな？あちこちにおいてよく分らないけど。殆どは人間を嫌っているよ……」

「そうか……」

利幸と潤一は見合った。これからどうしていけばいいか分からなかった。元の世界に戻りたいが、あの転送装置が故障となるとどうする事も出来なかった。この世界を漂っていても何も解決はしないと思っていた。しかし、救いだったのは仲間と見てくれる獣人がいてくれたことだった。もし、その存在がなければ、今頃は天国か地獄だっただろう。と突然、ユタが質問してきた。

「これからどうするの？」

「どうしようか？今は人間界には戻れないし……何をすると事もないしね……潤一はもう二度と戻らないから、どっかの物語みたいに戻す方法を探すってことはやるだけ無駄……やる事が見つからないんだ……。せめて、この獣人界の人間を嫌う奴等が何をしようとしている事さえ知る事ができればな……」

ユタはある事をひらめいた。

「ねえねえ、僕に手伝えることはないかな？」

「え？」

「僕、人間の役に立ちたい。だから、僕を連れて行ってもらえないかな？一緒に」

「ナンド？　コノ仲間ガ増エルフラグハ？」

少々苦笑いな潤一。しかし利幸はOKサインを出した。ユタは喜んで、跳び回っていた。こいつ本当に蛇なんですかと疑うくらいに。その後、1人と1匹はこの小屋に泊めて貰う事になった。その夜の事。ユタはこれらどうするかを訪ねてきた。

「これから・・・とにかくあの装置は今修理しているだろうし。長くはならないと思うんだ。だからこの辺で情報を収集しようと思っている。ただ、俺は戦力不足だけだね・・・」

「ソウイエバ、俺以外二竜人ツテイルノカ？」

「うん・・・僕は1回しか見たことない・・・」

「見た事があるってことはここには竜人は存在するんだな。よかったな。潤一」

嬉しいような嬉しくないような・・・。そんな気持ちになっていた。その後は会話をしながら夜を過ごしていた。

2 2 敵獣人 仲間獣人（後書き）

感想や評価、よろしくお願ひしますっ

2 3 新たな脅威 それは大昔の・・・（前書き）

もう、この辺にまで来ると内容がごちゃごちゃになってしまっています。そのことを踏まえて、閲覧してください。それではどうぞ。

2 3 新たな脅威 それは大昔の・・・

一方こちらは人間界。朝を迎えていた。橋の下で眠っていた靖は目を覚ました。

「うっ・・・もう朝か。ふわぁ〜」

大きな欠伸をした。身体の疲れは少しであるが残っていた。ゆっくりと体を起こして、進の方を見た。しかし、そこに進の姿はなかった。

「あれ？進さんがいない。何処に行っただら？」

と進が寝てたところに紙きれの様な物が落ちていた。靖は気になって、その紙を手にとってみた。そこにはこう書かれていた。

“福田靖へ 俺とはある条件で獣人に捕まってしまった。本当に申し訳ない。でも、お前の事を考えたら、俺が捕まった方が妥当だと思っただ。お前も捕まってしまうと、未来への希望が絶たれてしまうからな・・・。まあ、俺はすぐにでも逃げ出すさ。またお前と会えたらいいな・・・。じゃ、また会う時までな。 小野崎進”

言葉を失った。自分が寝ている間に進は捕まってしまったのだ。自分の不甲斐無さに愕然としていた。しかし、今は落ち込んでいる暇はない。もしかしたら、生存者は自分だけかもしれない。自分でできる事は少ないかもしれないけれど、やれることはやらないと思っていた。しかし、何をしたらいいのか分からない。今はとにかく、進を見つけて出す事が最前線だった。靖は、傍で寝ていたカナヘビ（

優子)を後ろのフードの中に入れ、斜面を登り探し始めた。

*

ここは人間界側の獣人の研究施設内部。進は両腕を鎖で繋がれ力なく下を向いていた。体中に傷があり、獣人にやられたものと思われる。そんな進に白衣をまとった獣人が数匹近づいて来た。進はゆっくりと顔を上げ、獣人を睨みつけた。

「どうしたんだ？そんな怖い顔をして」

「貴様ら！俺をどうしようっていうんだ・・・」

「何って？新しい実験の被験者になってもらう為にここに連れてきたんだよ」

「何の実験だ！？俺を獣か獣人にしようっていう奴か！？そんな事はお断りだ！」

獣人はその返答にくすくす笑っていた。

「馬鹿め。もう獣人・竜人の実験は成功している。私達が言っているのはその実験ではなく、新しい実験ことだよ」

「な、何だと！？もしかして、誰かがもう実験台にされたっていうのか！？」

「その通りだ。もつとも、こつちの世界ではなく、私達、獣人界の方でだけどね」

「な!？」

「お前にする実験はもつと素晴らしいものだ。子供なら大喜びだ。遙か昔に絶滅した生物になれるからね。まあ、お前は2人目だけどな。1人目は失敗したからね」

そう言いながら、進に近づく1匹の獣人。そして、何かを取りだしたかと思うと、すぐに進の腕にさした。獣人がとりだしたのは麻酔薬だった。抵抗する間もなく、進は眠りについてしまった。

「さあ、お前は生まれ変わるのだ・・・とても大きな暴君に」

*

「進さん〜！何処に行つたんだ〜!？」

大声を出して探すか、声が木霊して戻つてただけだった。動物達が、靖をじつと見ていた。何とも言えない感じに包まれていた。ここで大きなため息をつく靖。カナヘビも口を開いていた。靖は夜を過ごした橋の上に戻ってきた。橋の柵に手を置いて、川を眺めていた。川の中にはカメやワニなど水辺で過ごしている動物がたくさんいた。

「もしかして・・・自分以外にはもういないのかな?いや、そんな

はずはない。世界は広いんだ。グアム島で何年も逃げのびていた日本兵もいたんだ。この世界のどこかに生存者はいるはずだ。そう思っていた方が希望が持てる」

そう思っていた時だった。靖の後ろをたくさん動物が通り過ぎて行った。中には虎やクロヒヨウの姿もあった。肉食動物だと言っても中身は人間だからな……。と思っていたが、想像以上に焦っている表情だった。何かなと思って、逃げてきた方向を見た。靖は目を疑った。

「て、ティラノサウルス!？」

そこには大昔に絶滅したはずの肉食恐竜のティラノサウルスの姿があった。口からは唾液の様な物が出ている。息をするたびに不気味な音がしていた。ティラノサウルスの見た靖は息が荒くなっていた。

「う……。うそだろ? 嘘だと誰か言ってくれ!」

しかし、誰も嘘とは言わなかった。ティラノサウルスはこちらに気付いた。そして、大きな口を開けながら、こちらに突進してきた。

「うわあああああ!」

靖は叫びながら、全速力で走った。ティラノサウルスは大きい為に一歩一歩の歩幅が大きい。少しずつではあったが、徐々に距離を縮められていた。体力の限界に達していても、スピードを緩める事はなかった。もし、捕まれば確実に死の世界へ行ってしまうと思ったからだ。

「ハア、ハア! く、苦しい……。うわっ!」

とうとう身体が追いつかずに、その場に転倒してしまった。すぐに立ち上がるうとしたが、ティラノサウルスの右脚が靖を捕らえていた。身動きが取れずにいた。

「う……こ、ここまでか……くそう！くそう！！！」

涙を流しながら、叫んだ。ティラノサウルスはゆっくりと顔を靖に近づけた。死ぬ覚悟はできていた。でも、やはり死は怖かった。

「し、死ぬなんて嫌だ！自分はもっと生きていよ！いろんな事をしたいよ！やりたい事だっっていっぱいあるんだよ！お前なんかに食われたくないよ！！！」

「グワウ」

靖の言葉に反応するようにするように呻くティラノサウルス。靖は聞こえなかったのか、涙をずっと流している。ティラノサウルスは大きな口を開いた。ゆっくりと目を瞑る靖。

「もう……駄目か……」

とここで、ティラノサウルスはゆっくりと靖の顔に近づいて驚く行動をとった。

ペロペロペロッ

まるで犬の様に顔を舐めまわした。靖は身震いして目を開いた。

「うわああ~~~~！な、舐めるな！味見みたいな事をするな~~~~！」

「グワツ」

「え？」

さすがにその呻きは聞こえた。ティラノサウルスはゆっくりと顔を離した。その行動に驚きを隠せない靖。ティラノは右脚を靖から離れた。靖はすぐに立ち上がってティラノサウルスから少し離れた。ティラノサウルスは静かにこちらを見ていた。

「・・・なんだ？このティラノサウルスは？」

ティラノサウルスはゆっくりと近づいて、目の前に紙切れを落とし、靖は戸惑いながらもその紙きれを取ってみた。そこには文字が書かれていた。

“私は・・・尾原由姫おはらゆめ、獣人に捕まって実験台にされたものです。獣人達は私をこんな姿に変えたのです・・・。信じてはもらえないかもしれないですけど・・・私は元人間です”

靖は紙きれの文字に目を通すと、再びティラノサウルスの方を見た。ティラノサウルスは少し悲しそうな表情をしていた。もしこれが偽りだったら、中身もティラノのはずだ。そうであれば、自分は今も食われている。しかし、そんな事をしなかった。これは限りなく事実に近い様だった。

「お前・・・人間だったのか？」

ティラノサウルスはゆっくりと頷いた。靖は肩を撫で下ろした。ホツとしたと同時に不安が立ち込めてきた。もし、獣人が他の生存者

を捕まえてこんな事をしているのかという事を考えると、気持ちが悪く落ち着かなかった。いずれは生存者全員が姿を変えられてしまう。そう思った靖はある事をティラノサウルスと化した人間に言った。

「ティラノサウルスよ……。ちょっと自分の提案を聞いてくれな
いか？」

「ウグワアッ」

ティラノは声を放って頷いた。

「このままだと……全世界の生存者が姿を変えられてしまうかもしれない。だから、それを阻止したいんだ。全員は無理かもしれない……。でも、できるだけ救出したいんだ。もし、全員が姿を変えられてしまえば、希望がなくなってしまう。手を貸してくれないか？勿論、ただではない。お前達を元に戻す方法も見つける！大丈夫。あいつ等は人間にしたんだ。あいつらなら元に戻す方法も知っているはずだ。だからお願いだ」

「グウ！」

ティラノサウルスは大きく頷いた。その行動にようやく笑みが出た靖。ティラノサウルスはゆっくりと近づいて、靖の服を易しく啜えた。そしてゆっくりと靖を背中に乗せた。

「あ、ありがとう」

少々恐怖感を覚えた。恐竜に啜えられるなんて人生で一度もないかと思っていた。しかし、その反面、嬉しさもあった。本物の恐竜に乗るなんて絶対にない事だ。ティラノサウルスはゆっくりと歩き始

めた。生存者を探すために、瓦礫の山を進んでいく。

2 3 新たな脅威 それは大昔の・・・（後書き）

評価・感想等よろしくお願いします。

2 4 仲間が必要(前書き)

題名と合っていないような気がするけど、気にしないでください
W
(殴)

2 4 仲間が必要

獣人界は朝を迎えていた。潤一と利幸はユタという蛇の獣人の小屋で眠っていた。ここは森の中で、太陽の光はあまり入ってこない。まず、起きたのは潤一だった。背伸びをして、身体を起こした。利幸とユタはまだ夢見心地だった。潤一は立ち上がり、窓から外を見た。辺りは静かでひっそりとしていた。風が森の中を通り抜けていく。風を受けた葉っぱは宙に舞ったり、靡いたりしていた。

「ソロソロ時間ダ……。皆ヲ起コサナイト……」

潤一は利幸とユタを起こした。まず起きたのは利幸だった。眠たい目を擦りながら身体を起こした。

「おお、潤一、おはよう。お前は起きるのが早いな……」

そして、数分後にユタが目覚めた。大きな欠伸をした時、長く細い舌が出てきた。さすが蛇、と感じた。ユタはゆっくりと立ち上がって一声あげた。

「シャアアアアア」

紛れもない蛇の鳴き声。突然の事に吃驚する潤一と利幸。ユタはすぐに状況を把握した。

「あつ、ごめんなさい。毎朝、この声を出さないと1日が来ない感じがして……」

「あつ、そうなんだ……」

苦笑いをしながら頷く利幸。潤一はというと真顔で固まっていた。気絶はしていないが、突然の事に状況がうまくのめていなかった。その後は、情報収集のための身支度をした。そんなに荷物はいらない。ただの情報収集である。今、獣人界はどうなっているのだから、他の獣人は人間界の制服を知っているのだから。この後の人間界はどうなるだとか。怪しまれない程度でやることにした。

「俺はかなりの邪魔者だよな。できる事ないし。お前達について行くことしか・・・」

「何言ッテイルンダ。オマエハ、唯一ノ、生き残りカモシレナインダゾ？邪魔者ダナンテ思ッテイナイヨ」

「そうだよな。何ネガティブになるうとしてるんだ俺は。気持ち強く持たないとな。こんな事じゃ、この先乗り切っていけないよな」

「やっぱり人間っていいね。そうやって、仲間同士で励ますから」

「コレハ、獣人界デモ言エルコトダロウ？」

「まあ・・・」

力ない言葉が少々に気になったが、今はそんな事を考えている暇はなかった。

「とりあえず、行きますか？いつまでも突っ立っててもしょうがないしね」

「ソウダナ。ソロソロ出発スルカ」

そういうと1人と2匹は小屋を出て、森の中を歩き始めた。潤一と利幸は辺りを警戒しながら進んでいた。特に利幸は獣人に見つかればややこしい事になってしまふから、見つけたら隠れなければならぬ。いつも以上に辺りを警戒した。しばらく歩くと、森の出口が現れた。利幸はユタに手渡されたコートを身にまとった。コートを纏うと外見は人間だとは思わないほどになった。

「これ、大丈夫なのか？」

「大丈夫だよ。多分」

「多分ツテ・・・」

少々不安を残しながら、森を出た。森を出たすぐ傍には大きな町があった。人間界と変わらず、スーパーや銀行、郵便局などがあつた。でも、乗り物は全く見かけない。必要ないんだろつなと心の中で思つていた。町の中を歩くと、獣人たちはこちらを見てくる。竜人は獣人界ではかなりまれな種族らしい。だから、かなり珍しいらしい。こんなに見られたのは初めてだった。潤一は周りの視線がかなり気になった。

「周りノ視線ガキニナルナ・・・」

「でも、この状態だと、お前が元人間だという事はばれていないんじゃないのか？」

「ソウダナ。ソレハ救イダツタナ」

しばらく歩くと、ユタはある家を指さした。

「あの家は僕の友達の家なんだ。彼も僕同様に人間が好きな獣人だよ。もつとも、外では言えない事だけどね……」

「ドウシテダ？」

「ん？どうしてって……人間好きの獣人と人間嫌いの獣人は対立しているからね……。獣人のくせに人間を好きになってんじゃねえ……。だとかで」

納得するように頷く潤一と利幸。しばらく歩くと、ユタの友達の家の前に着いた。ユタはドアをノックした。

「ユタだけど、いますか？」

「ユタか？入ってもいいぞ」

ユタはゆっくりとドアを開けた。ユタは2人を静かに中に誘導させた。中は普通の家の造りだった。そして、玄関で待っていた蜥蜴と思われる獣人。ぱつと見たらリザードマンだ。

「ユタよく来たな。久々じゃないか。あれ？今日はお客さんが一緒か？」

「そつだよ」

「竜人ですか。珍しいお客さんが僕の家には何か用ですか？あと、そちらのコートの方は……」

「説明は僕がするよ。こちらの竜人は八幡潤一。元人間の竜人だよ」

「元人間!？」

蜥蜴の獣人は吃驚した。その声は外にまで響いていたが、誰も気づいてはいなかった。

「そして、こちらのコートの方は多々野利幸。人間だよ」

利幸はゆっくりとコートを脱いだ。人間姿は完全に露わになった。

「人間ですか!？初めて見ましたよ。でも、どうして人間が?それに元人間って・・・」

「ここで話すのもあれだから・・・ちょっと上がってもいいかな？」

「ああ、リビングで待っていてくれ」

そういうと蜥蜴の獣人は玄関の鍵を閉め、全部のドアにカーテンをかけた。外からは全く見えない状態となった。そして、蜥蜴の獣人は1人と2匹が待つリビングに来た。

「待たせて申し訳ない。まずは自己紹介だね。俺はデルタっていうんだ。よろしく」

「コチラコソ」

「よろしく」

「で、何で人間が竜人に？」

「俺八・・・実験台サレタンダ。ソノ人間ヲ嫌ウ獣人ノヤツラニ・・・」

「やっぱりあの噂は本当だったんだ・・・」

「噂？それって人間とか人間界に関係する事なのか？」

利幸が吃驚しながら聞いた。デルタはゆっくりと説明を始めた。

「最近、研究所の研究員が話しているのを盗み聞きしたんだけどさ、研究施設では密かに人間を獣人にする実験が研究されているとか・・・で、最初の被験者はあるうことか竜人にしてしまって、今は亡き者だとか」

「飛び出シタトキカ・・・デモ俺モトシユキモコウシテ生きテイルゾ」

「まあ、普通の人だったら死んでいるかもね。幸いにも軽傷だけで済んだけどね」

「ここからがやばい内容なんだけど・・・実験は新たな段階に入っているだって。人間界では人を恐竜にする実験が成功したとか」

「「ええ!?!」」

潤一と利幸は吃驚して同時に声を上げた。

「どうやら、人間界にも生存者はまだいるようだね・・・。大半は動物にされてしまったらしいけど・・・。そんな事を平気で出るな

んて・・・俺は絶対できないよ」

「まだ、生存者がいたんだ・・・」

「デモ、ステニ姿ヲ変エラレテイル可能性ガアルナ・・・」

「何処まで卑劣な獣人なんだろうな！俺はイライラするよ！」

デルタは怒りのあまり、テーブルを殴った。吃驚する1人と2匹。

「あつ、すまない。ついカツとなってしまうて」

「まあ、その研究をするという事はまだ、生存者がかなりいるのか
もしれないな・・・」

「デモ、時間ガナイ・・・ヘタシタラ皆獣人や恐竜ニサレテシマウ」

「俺の予想が正しければ、普通に恐竜にする訳がないよな。精神面
まで恐竜にして、人間を襲わせるとか・・・まあ、獣人がやる実験
は最初は失敗しそうだけど・・・」

「俺ノ時ハ、スグニ成功シタヨウダガ」

「あと、獣人にするという事は奴隷にするという事なんだろうな・・・」

潤一と利幸は深刻な顔で腕を組んで考えていた。ユタは静かにそれ
を見ていた。

「デルタ・・・僕達に何かできないだろうか？」

「そうだな・・・今考えているんだけど、情報によるとあと3日ぐらいに故障していた転送装置が治るとか？」

「え？それ本当なのか？」

「本当だ。もつとも、3日で治るかどうかは分からないけど」

「僕がいま思いつくのは人間の生存者を助ける事ぐらいしか・・・」

「俺もそう思っていた」

2人の意見の一致に、潤一と利幸は少し喜んでいった。生存者を探してくれる仲間ができて嬉しい気持ちでいっぱいだったからだ。

「じゃあ、俺達と生存者を救助してくれるのか？」

「ああ、今そう考えていた」

「僕も」

「・・・嬉シイナ。仲間が増エルコトハ」

その後、皆で笑顔を浮かべていた。

*

夕方。皆、デルタの家に泊まらせてもらう事になった。話した結果、転送装置が治るまで、この家を拠点として、情報を集めることにした。そして、転送装置が治り次第、施設に乗り込んで、転送装置で人間界に行く。そして人間界で救出活動をする、となった。今日はとりあえず、身体を休めることにした。リビングのテーブルには食べ物が並び、それ皆で囲んでいた。食べ物を頬張りながら楽しい会話が続いていた。

「へえ〜人間界には乗り物っていうものがあるんだ」

「ソウナンド。自動車や電車・・・飛行機や船モアル」

「飛行機って何？」

「飛行機っていうのはね。人間を乗せて空を飛ぶ乗り物なんだ」

「空を飛べるの！？人間って凄いね。そんなものを作り出すんだから」

「まあ。俺は作れないけどね」

利幸は笑いながら頷いた。全員の人間が作れる訳ではないけど、総合的に見れば、人間が作ったってことになる。

「作レタラソレハソレデ凄イダロ・・・」

「まあな」

お互いに笑っていた。それにつられるようにユタとデルタも笑った。

その夜、そのデルタの家は活気に包まれていた。就寝時間になってデルタは潤一に話しかけてきた。利幸とユタは既に眠っていた。

「潤一って言ったかな？」

「アア・・・ドウシタnda？」

「君たちは、俺達の事を疑ったりしないのか？一応獣人だから・・・」

「疑ウ？マア、最初八疑ツタナ。デモ、次第二疑イハナクナツタ力ナ。ソナ感ジニハ見エナイカラネ」

「その言葉、本当にうれしいよ。今まで信用されたことないから・・・」

「ソウナノカ・・・ソレハ辛イダロウナ・・・」

「まあ、慣れたから・・・いいけどね。もう寝よう。明日もあるし、転送装置が治れば忙しくなるしね」

「アア・・・ジャ、オヤスミナ」

「おやすみ」

そう言つと、2匹は眠りに着いた。

2 4 仲間が必要(後書き)

感想や評価、よろしくお願いします。

2 5 夜明けの戦い

人間界は真夜中であつた。寝ずに生存者を搜索している靖。出会つた元人間のティラノサウルスの背中に乗つて、辺りを見渡していた。しかし、真夜中なので遠くまでは見えない。辺りには明かりが全くない。街灯も電気が止まっている為、点いていなかった。

「真つ暗で何も見えない……。誰か気付いて悲鳴でも上げてくれたらいいのかな？」

「グウ」

靖の疑問に唸りながら答えるティラノサウルス。元人間、しかも女という事があつてか、足取りはゆっくりとしていた。まあ、無理はないかと思つていた。

「外見は恐竜界の暴君だけど、中身はか弱い女の子か……。女の子？ そう言えば年齢とか知らないんだつた。だからつて聞いても話せないから知れる訳ないよね」

そんな事を言いながら周りを見た。と、急に明るくなつてきた。もう夜明けに近かつた。空の東には明けの明星と言われる金星が確認できた。

「もう夜明けか……。時間が経つのが早いな……。由姫……。だつたかな？ ちよつと降ろしてくれないか？」

確認であるが、ティラノサウルスの名前は尾原由姫。靖は下の名前と呼んでいた。由姫は易しく靖の服を啜えると地面に降ろした。先

程よりか遠くが見渡せるようになっていた。しかし、人間の姿は全くない。しばらく、辺りを見てみると、何か大きな影が見えた。

「何だろう。あれ・・・」

靖は目を細めてみた。それはまたしても恐竜だった。すぐに何の恐竜が分かった。

「あれ・・・恐竜だ。しかもトリケラトプスだ」

トリケラトプスは辺りをずっと見ているようだった。靖の中ではあれも元人間ではないかと思った。確認する為に、接近してみることにした。ゆっくりと歩きながら徐々に距離を縮めていく。とその時だった。トリケラトプスはこちらに気付いた。そして、こちらに向かって走ってくる。

「こちらに気付いたようだ。こっちに向かってくるっていう事はあれ元人間・・・ってか元人間じゃなかったら完全に恐竜の生き残りか」

笑いながらそう思っていた。そして、数十メートルの距離になった。しかし、何かおかしい。トリケラトプスはスピードを緩めようとしている。それどころかどんどん加速していく。靖はその事に気付いていなかった。そして、悲劇が起った。

「え？ちよ！？うわっ！」

トリケラトプスは靖に突進してきた。靖はそのまま吹っ飛ばされ、倒壊したビルの壁に直撃した。そして、そのまま落下した。

「あゝゝゝ！うわゝゝ！」

腹を押さえたま立ち上がるうとしない靖。実は突進された時にトリケラトプスの頭についている角が靖の腹を貫いていた。運よく抜けたようだが、腹からは血が流れ出していた。痛みあまり、立ち上がれず、その場で痛みを耐えていた。しかし、トリケラトプスは容赦なく突っ込んできた。靖もいち早く気付くが立ち上がる事ができない。次第にトリケラトプスが大きくなっていく。もう終わりか。そう思った時だった。靖の目の前に由姫が立ちはだかった。そして、突進してくるトリケラトプスを受け止めた。

「ゆ、由姫・・・」

靖はゆっくりと立ち上がった。目の前では恐竜同士が戦っている。意識が朦朧としているが、腹を押さえながらその光景を見ていた。ティラノサウルスはトリケラトプスの角を掴み、そのまま投げた。トリケラトプスは瓦礫の山に落ちていく。しかし、さすが恐竜。何事もなかったようにすぐに立ち上がると、再び突っ込んでくる。ティラノサウルスは再びトリケラトプスを受け止めた。ティラノサウルスはゆっくりと押されていた。何もできない自分がもどかしかった。

「くそ・・・どうすれば・・・どうすればいいんだ・・・」

とここで靖は上を見上げた。靖の後ろには倒壊寸前のビル。そしてそのビルの屋上には今にも倒れそうな水の入ったタンクがあった。

「あ、あれだ！」

靖は痛みに耐えながら、ビルの内部へと入っていく。中はそこまで

損失はしておらず、階段も全部繋がっていた。靖は必死になりながら階段を上った。まだ、出血は止まっておらず、階段を上がる度に血が飛び散った。しかし、そんな事には目も向けずに上を目指した。一方外ではティラノサウルスがトリケラトプスに押され続けていた。必死に耐えようとするが、力がなく、そのまま後ろにあったビルに直撃してしまう。そのビルは靖がいるビルだった。直撃した瞬間、内部は大きく揺れていた。

「うわっ！」

揺れに耐えられなかったのか靖の後ろの階段がもの凄いい音を立てながら崩れて行った。その光景を見た靖は心臓が止まりそうだった。しかし、ここで放心状態になっている場合ではない。必死に精神を元に戻して、上を目指した。そのころ、ティラノサウルスは倒れていた。その上にトリケラトプスが乗ってきて、頭の角でティラノサウルスの腹を攻撃していた。

「グギヤア！グギヤア！」

攻撃されるたびに悲鳴を上げるティラノサウルス。血が微量ではあったが流れ出ていた。

*

靖は必死に階段を上り、ようやく屋上に着いた。そこには今にも折れそうな柱とその上にタンクがあった。

「この柱を壊せば・・・タンクが落下して下のトリケラトプスに当

たるはずだ……」

靖は一番折れそうな前の柱を叩いた。しかし、人間の力では全く微動だにしない。力のある限り、殴ったりけったりするが、やはり動かない。とここで靖は辺りを見渡した。何か使えるものがないかと探していたのだ。そして見つけたのが鉄パイプだった。靖はそれを拾うと、必死に柱を叩いた。少しずつであるが柱の表面のコンクリートが崩れていく。そのころ、ティラノサウルスは危険な状況に陥っていた。トリケラトプスの角が、首に刺さろうとしていたのだ。もし刺されば、いくらティラノサウルスだからと言っても死んでしまう可能性があった。靖はその光景を上から見ていた。一刻の猶予もない。必死に鉄パイプで柱を叩いた。もう出血の事なんて考えていなかった。

「壊れる！倒れる！柱折れる！！！」

渾身の力で柱を叩いた。その瞬間、大きな音と共に柱は崩れ、タンクが転がっていく。そしてタンクはビルから落下し、下にいたトリケラトプスの頭に直撃した。もの凄い悲鳴とともに、トリケラトプスは気絶した。ティラノサウルスはトリケラトプスをどかすと、ゆっくりと立ち上がった。そして、上を見上げた。そこには靖の姿があった。

「よかった。無事だったんだな……」

ティラノサウルスの無事を確認すると手を振った。ティラノサウルスも小さい手を振って返した。その後、靖はビルから飛び降りてティラノサウルスにキャッチしてもらった。今はこのトリケラトプスから離れることを優先して、その場を去った。途中、運よく見つかった包帯を自分の腹に巻いて止血した。ティラノサウルスの方の出

血は既に止まっていた。

「朝っぱらから凄い事になってしまったな・・・まあ、今の状況だったら何が起きてもおかしくないから、今はまだ序章に過ぎないのかな？」

「グワウ」

「まあ、いいや。自分が生きていないと、この世界がなくなってしまういそうで怖い。意地でも生きてやるさ。絶対に」

靖はそう意気込んだ。それと同時に太陽が昇り、暗い瓦礫の山を明るくした。

2 5 夜明けの戦い（後書き）

評価&感想をよろしくお願いしますっ

2 6 元の世界へ(前書き)

グダグダになってしまっていますけど気にしないでください

2 6 元の世界へ

獣人界は朝を迎えようとしていた。まず、起きたのは利幸だった。背伸びをしながら身体を起こした。

「もう朝か・・・寝てると時間が経つのが早いな」

傍では潤一、ユタ、デルタがまだ眠っていた。なんだか気持ちよさそうな表情をしていた。利幸は静かに身体を起こすと、カーテンを少し開けて外の様子を見た。外は相変わらず獣人達で溢れ返っていた。店の準備だろうか慌ただしい。そんな光景を静かに見続けていた。とその時、ユタが目覚めた。そして・・・

「シャアアアアア」

「うわっ!？」

ドシン

利幸は吃驚してその場に倒れた。思いつきり背中を強打した。そして大きな音に吃驚したのか潤一とデルタも飛び起きた。2匹は目をまんまるにしていた。

「い、一体何が起きたんだ!？」

「凄イ音ガシタゾ？」

「いつて〜」

潤一とユタとデルタは唸る利幸の方を見た。そこには上半身を起して痛がっている表情を浮かべる利幸の姿があった。まず、駆け寄ったのはユタだった。

「どうしたんですか？何処か打ったのですか？」

「背中だよ」

ユタは利幸の背中を触った。それと同時に痛みが強くなった。

「あゝ痛いって、そつとしといて。くう」

両手を真上に上げそのまま倒れる利幸。その行動に目を細める潤一とデルタ。

「何ヤツテイルンダヨ。ツテカドウシテソウナツテイルンダヨ？」

「発端はユタだよ！」

「僕!？」

「ユタの“シャアアアアア”に吃驚してこうなったんだよ」

笑いながらそう言う利幸。

「マア、確力ニ吃驚ハシタケド・・・」

少々呆れた表情で利幸を見ていた。こういふドジはよくある事だが今回は今まで以上に酷い感じがする。でもそれが利幸のいいところでもある。いつも活氣的だからだ。

*

皆が起き上がり、一通りの事を済ませ、リビングに集まった。今後の事を考える為である。転送装置が治るまでに少なくともまだ2日かかると思われる。それまでにできることはしておきたいのだが、何もする事がない。

「ここですつと考えている訳にもいかないでしょ？なんか情報を得るとか・・・できないのかな？つてかデルタは情報入手しているんだよね？」

「まあ、でもいつも情報を得ている訳ではないからな」

「コウシテイル間ニモ、人間ガ消エテイク・・・ドウシタラ」

潤一は深刻そうな顔で言った。とここで外が一気に慌ただしくなった。なんだろうと思いきは2階に上がりゆつくりとカーテンを開け、外を見た。何やら獣人達が何かを探しているようだった。利幸は獣人達の方に耳を傾けた。すると会話が聞こえてきた。

「おい！聞いたか？」

「ああ、聞いたよ！昨日見た竜人は元人間だったらしいな！」

「それにあの黒いコートの奴は人間らしいわよ！」

「実験で竜人にされたからって元人間だから、何をするか分からない

いぞ！すぐに捕まえるぞ！」

「「おお」「」

利幸はかなり焦った。既に自分達の事がばれてしまっていた。額からは汗が滲み出ていた。利幸はすぐさまこの事を伝える為、階段を駆け降りた。そしてリビングに飛び込んできた。

「どうしたの？利幸さん。顔色が悪いですよ？」

「大変なんだ！俺と潤一の事が既にばれてしまっている！」

「ナンダッテ！？」

「どうやら、何処かで俺達は研究員に目撃されてしまっていたらしい！」

「運悪く、ここに来ていた研究員にばれたとしか考えられないな・・・」

「コノママジャ、イズレバレテシマウ・・・」

潤一と利幸は焦っていた。捕まれば間違いなくまた牢獄行きだ。それは絶対に避けたい。しかし、逃げ場がほとんどない。

「・・・こうなったら賭けてみるしかないな」

「え？何に？」

「ユタには教えていなかったな。実は俺の家には地下を通る道があ

るんだ。そこは研究所の裏に繋がっている」

「そんな通路があるんだ。でも、それを使ってどうするの？」

「直っているか、直っていないのかに賭けてみるんだ」

「デモソレツテ・・・」

「ああ、直っていなければ、捕まってしまう。だが、今はこうするしかない。むやみにでいけば確実に捕まる。ちよつとの可能性だがやってみるしかない」

「・・・そうだよな。今はそうするしかない。生存者を守るためにも・・・」

潤一とユタも利幸とデルタを見てゆっくりと頷いた。デルタはすぐに秘密の通路に案内した。そこは明かりもない洞窟の様な通路だった。基本、道は真っ直ぐに続いていた。しばらく歩いた先には上に続く梯子があった。そこを登り、天井のふたを開けると、そこはもう研究所の裏だった。

「意外にあっさりと来れたな・・・」

「コレカラが大変ナンダケドナ」

1人と3匹はゆっくりと裏口の開いている窓から中に潜入した。転送装置がある階は6階。階段を使ってゆっくりと慎重に登っていく。

「デルタ・・・大丈夫なの？」

「分からない。いつ出くわすか分からないから気を引き締めとけよ」

「今にも出そうな雰囲気だけどね」

「マア、出タ時八、出タ時ダ」

なんて言っているとあっさりと見つかってしまう。

「侵入者だ！あの元人間の竜人と逃げ出した被験者だ！それと2匹の侵入者もいるぞ！」

「まずい！逃げろ！」

利幸は大声で叫んだ。皆は、6階の通路へと逃げた。後ろからは大声で駆けつけた獣人達が迫ってきていた。1人と3匹は必死に逃げる。とここで前方からも獣人が現れた。挟み撃ちだ。思ったが左に通路が見えた。迷うことなくその通路へと逃げ込む。そのまま真っ直ぐ進んでいくと目の前に扉の開いた部屋が見えた。

「あの部屋に逃げ込もう！」

利幸を先頭にその部屋に入っていく。最後に入った潤一が扉を傍にあつた紐で頑丈に固定した。皆が逃げ込んだ部屋、そこは転送装置の部屋だった。前は2つだった転送装置の台も8つに増えている。

「転送装置の部屋だ。運が傾いてきたかな？」

「でも、動かないと意味がないよ？」

「やってみるしかない。潤一、ユタ、デルタは転送台の上に横にな

*

「ここ……までか……」

こちらは人間界の靖。今、靖は生死の境目に立たされていた。目の前には無数のライオン、トラ、ヒョウの姿。靖は着ていた服が血まみれになるほど、出血していた。この動物は精神までもが動物と化した人間。だから、人間である靖を襲ってきたのである。一緒にいたティラノサウルスの由姫は、無数の肉食動物に襲われ、今は動けない状態だった。靖と肉食動物との距離がジワリジワリと縮まっていく。

「……人間として、何もできなかった……生き延びる事ができなかった……」

靖は泣いた。こんな終わり方をするのは嫌だった。しかし、運命には逆らえなかった。肉食動物達が一斉に靖に飛びついた。そして、胸元に食らいついた。

「ギャアアアアアア！」

大きな悲鳴は黒ずんだ空に響き渡った。

*

雨が降っている。そんな中、倒れる靖。体中は血だらけで、所々は食いちぎられたのか酷い状態となっていたが、骨が出るほど深くはなかった。とここで靖の右手が静かに動いた。靖はまだ生きていた。

「・・・自分は・・・まだ生きているのか・・・まだ死んではないのか・・・」

靖は自分の手を見た。そこには血まみれの自分の手があった。まだ自分は生きているんだと実感したが、体が動かない。傍にはあのティラノサウルスがいた。靖が目を見ましたのを見て、顔を近づけてきていた。靖はゆっくりとティラノサウルスに触った。

「こんな不甲斐無い自分で申し訳ないね・・・君を守ってあげられないなんて・・・ほんとどうしようもないよ」

「グワウ！」

靖は何もできずに真上を見ていた。そんな靖をゆっくりと両手ですくい上げると、そのまま、ティラノサウルスは歩き始めた。

2 6 元の世界へ（後書き）

感想&評価よろしく願いますっ

「いてててて……」

頭を押さえる利幸。何処かで頭を強く打ったらしい。ゆっくりと体を起こした。

「……あれ？」

すぐに気付いた。本来なら人間界の転送装置にいるはずだが、利幸は山の中を流れる川の傍にいた。川の流れはゆるやかである。風が少しあり、木々が揺れている。

「やっぱり完全には治っていなかったのか……だからこんな場所に飛ばされたのか……。そう言えば他の皆は？」

すぐに立ち上がって周りを見た。すぐ傍にユタが倒れていた。利幸はすぐに駆け寄った。

「ユタ。大丈夫か？」

「……うつ」

ユタは意識を取り戻し、ゆっくりと体を起こした。ユタも利幸同様に頭を強打したらしい。

「ここは何処？」

「さあ？こんな場所見た事がない。人間界なのは確かだと思っただ

が・・・」

「・・・」

「潤一とデルタの姿はないな・・・どこか別の場所に飛ばされてしまったようだ。早く探したほうがよさそうだ」

利幸はユタをゆっくりと起こすと川沿いに沿って歩き始めた。

*

「ここは何処なんだ？酷いありさまだが・・・」

「何処カノ町ダト言ウ事八間違イナイ・・・」

「・・・いつになったらまともに喋れるんだ？まだ慣れていないのか？」

「ンンン普通ニ喋ロウトシテモマトモニ出ナインダヨ」

潤一とデルタがいた場所は襲撃され、瓦礫の山と化した町だった。しかし、潤一はこの町を知らない。どこか別の町に飛ばされたみたいだった。この町もすんでいた町同様に動物達が戸惑った足取りで町の中を彷徨っている。中には泣いているのか鳴き声を放つ動物もいた。

「この動物達は・・・元人間なのか？」

「アア・・・元々ハ普通ノ人間ダツタ・・・。デモアノ日以来・・・」

「獣人達に襲撃された時か？全く、酷い事をしてくれる奴らだよ。同じ獣人だけどかなり恥ずかしい」

「マダ事が終ワツタ訳ジャナイ・・・コレカラ更ニ酷クナル可能性モアル・・・ソレヲ食イ止メナイト」

「その前に利幸とユタを見つけ出さないとな・・・」

そんな会話を遠くから監視する獣人の姿がいた。双眼鏡を片手にこちらを見ているが潤一もデルタも気づいていない。獣人は通信機を取りだした。

「こちら人間界監視員。実験被験者の人間と人間に協力する獣人を見つけました。」

「了解。すぐに特殊隊を派遣する」

そんな事には気付かない潤一とデルタは利幸、ユタ、生存者を探すために歩き始めた。

しばらく辺りを検索するが一向に生存者が見つかる気配がない。体力は徐々に消耗されていく。太陽が出ていないのは少しの救いだっただ。もし出ていれば体力の消耗がさらに激しくなっていた。しかし、

息が上がっている。少し休むことにした。

「全然、見ツカラナイ・・・」

「この辺にはもういないのか？これだけ探してもいるのは動物だけ・・・。利幸とユタの姿もない。別の場所を探したほうがよくないか？」

「・・・」

そんな2匹に襲撃の時が訪れた。頭上から何者かが潤一とデルタに襲いかかってきた。すぐに気付いた2匹はその襲撃をかわした。地面にぶつかるのと砂煙が巻きあがった。潤一は避けた勢いで倒れてしまった。

「ダ、誰ダ!？」

砂煙の中から現れたのは武装した虎獣人だった。しかし、その獣人1匹ではなかった。気付けば周りを獣人で囲まれていた。

「チツ！特殊隊の奴らだ」

「特殊隊・・・面倒ナコトニナリソウダナ・・・」

獣人たちは潤一とデルタに近づいて行く。2匹にはなすすべがない。無暗にかかっていけばすぐに捕まってしまうだけ。頭を働かせた方がいい案が浮かばない。こんな時に飛べればいいのにと考えてしまう潤一。しかし、ここで1匹の獣人が悲鳴を上げた。

「グワアアアア!」

悲鳴を上げた獣人はその場に倒れた。左肩からは血が出ていた。何かに撃たれてた様な痕だった。皆、倒れた獣人の向こう側を見た。そこにはショットガンを持った人間の姿がいた。銃口からは煙が出ていた。どうやら彼が撃つたらしい。その襲撃に獣人達の標的が変わった。一斉にその人間に向かっていく。とその人間はショットガンを再び構え獣人1匹1匹に撃つていく。撃たれた獣人は次から次へと倒れて行く。武装は簡単に破壊されている。そして最後の1匹となった虎獣人は身を翻してその場から去っていった。

「ちっ、逃げたか・・・」

そう呟くとその人間はショットガンをしまい、潤一とデルタに近づいてきた。その人間には戸惑いはなかった。

「お前達・・・悪い奴じゃなさそうだな。あんな奴等に襲われている所を見た限りは」

「・・・生存者ガイタ・・・」

「生存者？俺の事が。何で竜人がそんな事を心配するんだ？どうでもいい事だろうに」

「その竜人は元人間だ。だから生存者の事は気にするんだよ」

「・・・マジか。元人間・・・という事はお前もか？」

「俺は違う。俺は人間達に協力する為に潤一と、今はいないが利幸とユタと共にこっちに来たんだ。だからお前を襲つたりはしない」

「・・・ややこしいが、大体は分かった。こうなると人間も残りわ

ずかなのか……。全く獣人たちの考えている事はおかし過ぎる」

その後、彼らは自己紹介をした。ショットガンを持つ彼の名は新田^{にった} 穴道^{しんじ}、中学2年生。持っているショットガンとその弾は拾ったものらしい。穴道の親は精神までもが動物と化していた為、穴道に襲いかかってきた。腕の傷はその時にできたものである。その後、逃げ切ったものの、行くあてがなく、拾ったショットガンを片手に瓦礫の山に身を潜めていたらしい。

「……その利幸っていうのは人間なんだ。今この世界には何人生き残っているんだろう……」

「俺ミタイニ獣人ニ変エラレテイル者モイルカモシレナイシナ……」

「その計画がまだ、続いているのなら……こんな所でじっとしている場合じゃないな……。一刻も早く、その利幸とユタって奴を見つけ出して、獣人達の計画をぶっ潰さないとな……」

「そうだな……。俺は獣人だけど、この計画には反対だ。俺もこの計画をぶっ潰したい」

1人と2匹は話を終えると、立ち上がって、その町を後にした。逸れた1人と1匹、そして生存者を探すために。

*

「・・・ユタを放せ！」

「なら、こちらに來い。お前は実験台となる運命なんだよ」

こちら利幸とユタ。現在の状況は深刻な状態となっていた。ユタが別の特殊隊の獣人に捕まっていた。話してほしければ、実験台になれという交換条件を出してきた。

「僕には構わないでください！早く逃げてください！」

「・・・そんな訳にはいかないだろ！見捨てることなんてできない
！」

「なら、俺達の言う事に従え。素直に実験台になるんだ！」

利幸は歯をギシギシさせていた。何という卑劣な奴なんだと思っていた。しかし、このままではユタに害が及んでしまう。利幸の中で選択肢は1つだけとなった。

「・・・分かった。事件台になってやる。その代わりに、ユタに危害を加えないことを保証しろ！」

「いいだろう」

獣人はユタを放した。そして他の獣人と共に利幸に襲いかかった。すぐに捕まり、利幸は連れて行かれた。ユタはその場に倒れるが、利幸の方を見た。

「と、利幸さん！」

「ユタ！お前は潤一達と獣人の野望を阻止してくれ！」

そう言うと、凄い速さで獣人たちは去った。ユタは何もできる事ができずにその場に泣き崩れた。

2 8 それぞれのこれから(前書き)

なんかどんどんおかしくなっていく……。

2 8 それぞれのこれから

「グワウ・・・」

「大丈夫だつて。もう平気だからさ」

山の付近。川の畔で休む。靖とティラノサウルス。あのあと靖は意識を取り戻し、順調に回復していったのだ。傷は残っており、生々しいが気にはしていない。もう痛みも全くない状態だった。とても深刻な状態ではあるが、川の流れる音が心を和ませていた。

「この音、いいよな。前は好きな時にこの音を聞けたんだけどな。今はそれどころじゃないもんな。このままじゃ、日本・・・いや世界が支配されてしまう。手を打ちたいが・・・敵う筈ないよな。相手は相当な数だろうし・・・」

「・・・」

「まあさ、こんな所で考えてい場合じゃないよな。こんな事をしてい中でも獣人たちは新たな計画を実行しているかもしれない。これ以上ここが攻められたら、致命的だ・・・それ何としても食い止めないと」

「グワツ！」

ティラノサウルスは首を縦に振った。

「お前もそう思うか・・・よし、じゃあ、行きますか。今は生存者の探索だ。自分達だけじゃ何もできそうにないからな。仲間は多

「方がいいからね」

「グワツ！」

「よし！」

立ち上がる靖。ゆっくりと歩きはじめると、そのあとを追うかのよう
にテイラノサウルスが歩き始めた。空はどんよりと曇っている。

*

「さて、逃げるな！おとなしく止まれ！」

「止まれって言って止まる奴が何処にいるんだ！」

こちら獣人界側研究所内部。利幸が獣人から逃げていた。あのあと、
捕まった利幸は獣人界に戻され獣人にされそうになったが、一瞬の
すきを突き逃げ出したのだ。そして今の状況。曲がり角を使いなが
ら獣人から逃げている。中には曲がり切れずに壁にぶつかる者や、
つまずき転倒した獣人に獣人が躓くという何ともかつこ悪い者もい
た。そんな獣人達が逃げる利幸は曲がり角のすぐ傍にあった扉の中
に逃げ込んだ。獣人たちは気付かず走り去っていった。壁に凭れ、
一息つく利幸。そしてその部屋を見渡した。そこは何かを研究する
ような場所だった。色々な書類が散乱している。その1つを手にと
って見た。

「（計画5・獣人、人間界移住作戦）・・・！」

利幸はその書類を開いてみた。そこにはこう書かれていた。

“計画は順調に進んだ。あとは、獣人が人間界に移住すればもう人間界も獣人界へと変わるだろう。1週間後の8月1日の午前8時。この作戦を決行する。作戦内容：転送装置を使い、選ばれた獣人を人間界に連れて行く。協力を得て、人間界にすんでもらう。目撃した人間は直ちに殺すように命じる。あとは、い獣獣人が増えれば、作戦は成功となる。ここまでできたら成功も当然だ。この日が待ち遠しい”

「8月1日って・・・あと3日しかない・・・時間の猶予はない。でも人間界の奴らはこの事を知らない。どうしたらいいんだ・・・」

とその時、誰かが入ってきた。利幸は慌てて、奥の棚に身を隠した。入ってきたのはメスの猫獣人だった。散らばっている書類を集め始めた。全部を手にとり、何かを確認していた。そして一言。

「あれ？計画5がないわ」

（やばっ！）

計画5の書類は利幸の手にあった。慌てていた為、書類を置くことを忘れていた。利幸は焦った。これは気付かれたかと思った。

「・・・別の場所にあるのかしら」

そう言うと獣人は部屋を後にした。扉が閉まる音を確認すると、戸棚から身を出した。

「やっぱりそこにいたのね」

「うぐっ！」

畏だった。獣人は出て行くふりをしていたのだった。獣人はゆっくりと利幸に近づいて行く。

「おとなしく捕まりなさい。あなたは逃げられないのよ」

「そんな事決まった訳ではないだろ？決まっているように言わないでほしいな」

「そう、じゃあ捕まえてやるわ！」

獣人は飛びかかってきた。しかし、その行動を察知していた利幸は身を屈め、そのまま攻撃を避けた。そして、机の上にあった木の棒を投げつけた。棒は獣人の背中にあたった。

「フニヤア！」

獣人は態勢を崩し地面に叩きつけられた。

「俺も馬鹿じゃないんだよね」

そう言うと利幸は書類を持ったまま、部屋を後にした。そして、獣人達の視界に入らないようにし、時間をかけ、研究所を脱出した。あの時の研究所とはまた違う場所であったが、何なく抜ける事ができた。

「とりあえず、ここから離れた方がよさそうだな」

利幸は傍を流れていた大きな川に沿って下流に走った。

*

「でここは何処なんだ？全く知らない道何だが？」

「俺二聞カレテモナ・・・」

潤一、デルタ、宍道は完全に迷っていた。それもそのはず、ここは見たことのない道。それも山の中。普通なら入らないが何故か山に足を踏み入れてしまった。結果、迷ってしまった。曇っている為、周りは暗く、視界が悪い。道はというと歩くのに夢中で見失っていた。八方ふさがりである。

「人間界はややこしい場所が多いのか？」

「マア・・・」

「日本は広いからな。コンナ場所が多くても不思議ではないと思うけどな」

「確力ニソウダナ・・・」

会話をしながら歩くが、見えるのは聳え立つ木ばかりである。いっ

こうに道も出口も見えてこない。これは迷子というよりは遭難に近かった。しばらく歩くと雨が降り始めた。それも大雨。幸いにも木々が滴を直接身体に当たる事をカバーしていた。しかし、地面は濡れ、そこから中に水たまりができた。視界もさらに悪くなり、霧が出てきた。何とも運が悪い。

「何か出そうな雰囲気だな。でも、心配はいらないな。俺に任せとけ。何か出てきたら、このショットガンで粉碎してやるさ」

「無暗に撃つのは誤解を招くぞ。ちゃんと相手を確認してからやった方がいいと思うぞ？」

「それはもう心得ている。生存者なんて撃つたらたまったもんじゃないもんな」

歩く中、雨はどんどん強くなっていく。終いには何処かを流れている川の流れの音がしてきた。それも普通よりも凄まじい音で。

「川が増水しているみたいだな・・・もつと高い場所に行った方がいいんじゃないのか？」

「ソウダナ。・・・コンナ場所デハ・・・嫌ナ事が起キヤスインダヨナ・・・」

その矢先だった。潤一はぬかるんだ地面に足をとらわれ、傍にあった斜面を滑り落ちて行く。滑る速度はどんどん速くなっていく。デルタと宍道が覗きこんだときには既に姿は見えなかった。

*

「……さ……んい……ん」

「ウグウ……」

潤一は目を覚ました。あのあと、気絶をしてしまったようだった。頭を押さえながら身体を起こし、目を開けた。目の前に広がる光景に唖然とした。そこは野原の様な場所で近く of 崖には滝があった。それもいくつも。まるで幻想的な光景だった。

「やっとお目覚めになりましたね。」

「エッ？」

声のする方を見た。そこには竜人……いや完全な竜がいた。大きさは2mほどとそれほど大きくはないが、明らかに竜そのものだった。でも潤一は驚かない。自分の姿が竜人だから、竜を見て驚けと言われても驚けない。

「潤一様ですよね？」

「アア……（何故様付け？）」

「やっとここに連れてくることができました。さあ、こちらへ。」

「ド、何処二連レテ行クキダ？」

「竜王様のところですよ。詳しい話は宮殿でお聞きください」

そう言つとその竜は翼を広げ低空飛行を始めた。まだ、状況が飲めないが、とりあえず、竜について行くことにした。勿論、歩いて。

2 8 それぞれのこれから（後書き）

感想・評価よろしく願いします。

次話からは章が変わりますっ

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2411t/>

人間VS獣人

2011年9月6日20時19分発行